

化蝶譚

■登場人物（仮名）

久遠 新聞記者。増淵姓。妹、浅葱を遠縁に預ける途上で樹海に入り込む。
浅葱 その妹。久遠の母の再婚相手の連れ子で、血の繋がりは無い。斑谷姓。

露木 無政府主義者。特高に追われ、ロシアへの亡命を期し、樹海に逃げ込む。
葛城 その部下。純粹な革命戦士で、翠を恋している。
翠 同前。霧島姓。葛城の心を知りながらも、露木と関係を持っている。

近衛 昆虫採集者に身を窺し、樹海まで露木達を追跡して来た特高刑事。
東条 その相棒。元関東軍一等兵。独身。
生 家出をして樹海に入ってきた学生服の少年。
智恵 生と共に樹海を進むセーラー服の少女。

帽子の男 樹海の中を徘徊する浮浪者。

揚羽 化蝶。都を追われた邪教の一族。
紋白 揚羽の妹。

序 木霊

かつて、今また、やがていつか……反体制を唱えた党の指導者達が、あつさり
と権力に迎合した頃。人心を惑わした邪教が、法によって裁かれた頃。

観客が入場すると、そこには昼なお暗い森があり、規則的な響きが木霊してい
る。それは樵達の伐採、啄木鳥が木をつつく音……或いは、盤面に鋭く打たれ
る駒の音にも聞こえる。

ト、人の営みから閉ざされたその森の中を、黙々と進む一組の男女の姿がある。
学生服の少年とセーラー服の少女……この二人の名を、仮に生（ススム）と智
恵（チエ）と名付けるが、それは彼等の固有人名ではない。彼等はいつの時代
にもいる、大人の世界を拒んだ子供達である。

森には、低い唸るような風が吹いている。

彼等に荷物はない。二人の手首は赤い紐で結ばれている。その一点から、「駆
け落ち」、「心中」という言葉が連想されるが、その表情から「覚悟」の二文字
が読みとられる事はない。

彼等は耳を澄ましている。件の木霊が二人の神経を挑発する。生理感覚に根ざ
す危機感は、やがて観念的な恐怖へと変わっていく。そして、表情からは「躊
躇」の二文字が読みとれる。二人を結びつけている紐は、彼等のどちらがこの
道行きを先導しているか、その都度示す指針となる。

木霊が響く。生が立ち止まる。智恵は紐を手繰り寄せ、生を小突いて前進を促
す。

木霊が響く。智恵が俯く。生は紐を引っ張りながら智恵を励ます。……そんな
ことが幾度と無く繰り返される。

木霊の響きは、やがて間隔を狭め、重層的な物に変わっていく。地上からは見
えない雲の流れが、時折樹海の中を暗黒に包む。互いにしがみつきながら、じ
つと空を見上げる少年と少女……

鋭い木霊の一打ちが、耐え続けていた彼等の引き金を引き、てんでに駆け出す
生と智恵。短い紐は彼等の足取りをもつれさせるが、やがてそれもブツリと切
れてしまう。

交錯する木霊と闇……各々に連れ合いの居なくなつたことに気付く二人。すれ
違うように森の中を駆けて行く少年と少女……

と、その喧騒を縫うようにして、その響きの中を、水面を滑るように徘徊する
者が現れる。絵日傘をさし、娼婦のような紅い襦袢を羽織っているが、それは
帽子を目深に被った男である。ゆつくりと顔を上げる帽子の男……その表情は

と、再び連鎖して行く木霊の響き。
平手打ちの暗転。

去 流離

と、暗黒の木霊の響きの中で、幾つかの言葉が交叉する。

声壱（露木） 走れ！ 立ち止まるな！
声弐（近衛） 逃すな、追え！
声参（東条） 待たんか、国賊！

と、やがて木霊の響きが遠ざかるのと交差して、闇の中で北原白秋作詞、
中山晋平作曲の『さすらいの唄』が聞こえている。

へ行こか戻るか 北極光の下を
露西亞は北国 はてしらず
西は夕焼け 東は夜明
鐘が鳴ります 中空に

と、ゆっくりと辺りに明かりがさすと、そこはやはり樹海の中。舞台中央
に独りの女……霧島翠が佇んで、『さすらいの唄』を呟くように口ずさんで
いる。

と、そこに葛城が駆け込んで来る。

葛城 霧島さん！
翠 あっ！
葛城 無事でしたか？
翠 ええ。露木さんは？
葛城 判らない……
翠 ……そう……
葛城 いきなり暗くなったのが幸いしたんだか、悪かったんだか……どうなってるんだ？
翠 太陽が雲に隠れたんじゃないかしら。ここからは、まるで見えないけれど……
葛城 ……畜生、どっちを向いても、まるで同じようにしか見えない……
翠 ……ええ……
葛城 全く……こんな小さなセクトにも、お目こぼし無しか。

と、再び歌い出す翠。

へ泣くにや明るし 急げば暗し
遠い燈りも チラチラと……

と、葛城、慌てて……

葛城 おい、止せよ！
翠 ここで歌っていけば、きっと貴方達が見付けてくれると思っていたわ。葛城さん、貴方は来てくれました……だから……
葛城 ……しかし……

と、歌い続ける翠。

葛城 危険ですよ！ 連中だって、まだ近くに……
翠 同志の居場所は、露木さんしか知らないのよ！ それに……
葛城 ……
翠 行かなければ、露西亜に……葛城さん……

と、物音がして、「おい」と呼ぶ声がする。身構える葛城と翠。
と、木々の間から現れる男……露木である。

露木 俺だ。
翠 露木さん！
露木 君達も無事か？
葛城 はい。連中は……？
露木 大丈夫だ。近くには居ない。しかし……
翠 ええ。
葛城 ここまで追跡して来たとなれば、うかうかしては居られません。ひよっとして同志のアジトも既に……
露木 まさか？
翠 ……いや、その可能性も考慮に入れる必要が有るだろう。
露木 じゃあ……？
葛城 どの道、行ってみる他は無い。葛城、磁石は？
露木 はい……（と、ポケットを探る。無い）！ ……済みません、ここに来る間に落としたようです。
翠 何？
露木 申し訳有りません！ 連中に見つかるまでは、確かにここに……
翠 ……仕方が無い……勘を頼りに進むか……
露木 いえ！ 探して来ます。
翠 そんな……不可能だわ。
露木 何か有ったら……いえ、五分で戻らなければ、行って下さい。霧島さんを宜しくお願いします
翠 ……

と、葛城、森の中に走って行く。

翠 葛城さん！
露木 おい待て、葛城！
翠 ……
露木 無鉄砲な奴だ。
翠 責任感の強い人ですから……

露木 それだけじゃ有るまい。
翠 えっ？

露木 あいつを見ていると、若い頃の俺を思い出す。何かこう、進んで破滅したがっているよう
でな……

翠 ……（クスツと笑ったかも知れない）
露木 どうした？

翠 もう、若くないような云い方をなさるから……
露木 ……若くは無いさ、もう……

翠 ……
露木 あいつは、君に惚れているらしい。
翠 はい。

露木 判っていたのか？
翠 判ります。私、そんなに鈍感ではありません。

露木 ……そうか……
翠 ……

露木 ……後悔は、していないのか？
翠 えっ？

露木 俺達は、大杉さん達のように殺されるかも知れないよ、このまま、ここで……
翠 はい。

露木 ……良いのか……？
翠 本望です。

露木 ……若いよ、君も……
露木さん？

翠 ん？
露木 行きましよう、露西亜へ。
露木 ……ああ。

と、再び、あの木霊の音が森の中に響く。背後の木々の間に、将棋を続ける姉妹の影が映っている。

揚羽 お気をつけなさい。
紋白 えっ？

揚羽 ほら、飛車が……
紋白 ……

揚羽 気付けば闇……
紋白 うかうかする間に……

揚羽 明るくなったり……
紋白 暗くなったり……

と、露木と翠、何かに気付いたように……

露木 葛城さんを！

翠 ……そうだな……行こう。
はい。

揚羽
紋白
揚羽

と、二人、葛城の後を追って、木々の間に姿を消す。

見つかりましたか、出口？

いいえ……でも……これなら？

……お見事！

と、姉妹の将棋が続く。

式 彷徨

と、一組の男女が、木々の間から現れた。男は大きな荷物を両手で抱えながら、辺りをぐるりと凝視する。幼気さの残る女の方は、そんな男を見て、悲しげに肩を落とした。彼女の持っているのは風呂敷包みである。二人は兄妹で、兄の名は久遠、妹は浅葱と云う。

浅葱

……兄様……

久遠

……この辺りじゃなかったか？

浅葱

……はい……

久遠

確かに聞こえたのに……

浅葱

兄様、あの歌は……？

久遠

ああ……『さすらいの唄』だ。古い歌さ……

と、化蝶の姉妹が、また駒を打ち始めた。響きわたる木霊……同時に、樹海は再び闇に包まれた。風呂敷包みを投げ出して、兄に縋る浅葱。

あつ、兄様！ また

浅葱

浅葱！

やがて、ゆっくりと辺りが明るくなる。

と、久遠はじつと天空を凝視しながら、浅葱を抱きしめ、浅葱は暗闇に脅え、兄の胸に顔を埋めている。

と、久遠、辺りに明るさが戻ったのを確認して、浅葱の肩を叩く。

浅葱、顔を上げて。

浅葱

……明るくなった……

久遠

ああ。

浅葱

でも、どうして……？

久遠

雲が流れてるのかな？ 暗くなったり……

浅葱

明るくなったり？

久遠

どうもドンヨリと薄暗いな……嫌な感じだ。ひよっとして天気が崩れるのかも知れん。と

云って、見上げても幾重にも重なった枝葉ばかり。木漏れ日一筋見えなから……

と、鳥の羽ばたく音。驚いて再び兄にしがみつく浅葱。

久遠 大丈夫だ……啄木鳥も身を潜めていたんだろう……
浅葱 啄木鳥？
久遠 先刻から響いていた、あれ……啄木鳥じゃなかったか？
浅葱 樵の、木を切る音かと思いました。
久遠 樵か……そうなら有り難いが、この辺りに伐採の痕は無い。
浅葱 ……もし……もしそうならこの森から、戻れた、ですね……
久遠 ああ。
浅葱 ……

と、ここで初めて抱き合つたままである事に気付く兄妹。離れて、各々の荷物を持った。

久遠 さて……どっちがどつちなのか、さっぱり分からなくなった……
浅葱 ……
久遠 ……安心しろ。この森は直径で十五キロ、三里半一寸つてとこだ……全ての道は日本橋に通ず、だよ……
浅葱 ……
久遠 少し休むか？
浅葱 ……
久遠 先刻から顔色が悪いぞ。
浅葱 大丈夫。元氣です。
久遠 (自分の鞆を置いて) 坐れ！
浅葱 ……はい。

と、浅葱、久遠の鞆に腰掛ける。
久遠、ゴソゴソとあちこちのポケットを探っている。殆どペシヤンコになつた紙巻煙草の箱が出てくる。ちらりと鞆に目をやると、浅葱が坐つて俯いている。箱を破くと一本だけ出てきた。くわえて今度は隣寸を探す。無い。また、鞆を見る。浅葱はやはり俯いている。煙草を握り潰してポケットに入れる。

浅葱 ……兄様……
久遠 ……
浅葱 久遠兄様。
久遠 ……あ？
浅葱 ……堪忍……
久遠 ……よせよ……
浅葱 ……近道と云つたのは浅葱です……
久遠 よせ……

でも兄様は、森に入るのはやめようと仰いました……なのに浅葱は……
よさないか！ ……今更良いんだよ、そんな事は。だから、そうじゃなくて、つまりはだ、よせ……云うのは、その、つまり自分の事を三人称と云うか、固有名詞で云うのは、精神的に子供の人間がやる事だ……云うか……だから、でなくて、その、兄様って呼び方がだ

な……

浅葱

久遠

浅葱

久遠

浅葱

久遠

浅葱

久遠

浅葱

……悪かった……

……

浅葱……？

……

何とか云ってくれ。

……何と、お呼びすれば良いのかと思って……

……兄様でいい。

はい！

と、木々の間から、序景で歩き続けていた少年と少女が現れる。

智恵

久遠

あつ！
あつ！

と、久遠と浅葱、そして生と智恵の二組は、共に絶句して見つめ合っている。

久遠

……あ、あの……

と、生を小突いて引っ張る智恵。

生

あつ、あ、あの……御免なさい！

と、生と智恵は逃げるように森の奥に消えていく。

久遠

あつ、おい君達、待ちたまえ！

と、二人を追おうとする久遠。浅葱が呼び止めて。

浅葱

久遠

待って、兄様……！ 行つては嫌……
しかし……

浅葱

久遠

……独りにしないで下さい……
……だけど、今のは……

先刻から幾ら歩いても、ずっと同じように見える木々ばかり……兄様が帰って来なかったら……浅葱は……

久遠

浅葱

……分かった……ここに居るよ……

大丈夫だよ。今みたいなの……兎に角、人が居るって事は、まだまだ出られる範囲内って事だろ……それに、先刻聞こえていたのは、歌だ……『さすらいの唄』……これは間違いない。

浅葱

久遠

……歌……
……そうだ、浅葱、歌を謡え！

浅葱

久遠

えっ？
謡えば、きっと元気が出て来るぞ！

浅葱
久遠
浅葱
久遠
浅葱
久遠
浅葱
久遠

……

俺達に歌が聞こえたという事は、俺達が謡えば、それが誰かに聞こえるって事だ！ なっ！
えっ……はい……

こんな短い間に、歌だの叫び声だのが聞こえるとなれば、まだまだ望みは棄てたもんじゃ
無いぞ……兎も角、誰かに出会うのが早道だからな……

……

何でも、好きな歌を謡えよ、俺も一緒に謡うから……ええっと、じゃあ、一番新しく覚え
た歌でいいじゃないか……

一番新しく覚えた歌、ですか……？

うんうん、それで良いんだ！

だったら……ええと……

と、浅葱、たどたどしく増田好生作詞、森義八郎作曲の『紀元二千六百年』
を謡い出す。

〱金鵝輝く 日本の

栄えある光 身にうけて

いまこそ祝え この朝

紀元は 二千六百年

あゝ一億の 胸は鳴る

と、一瞬眉を顰めた久遠だったが、浅葱と共に謡い出した。
すると、木々の間から『紀元二千六百年』の歌を唱和する声が聞こえてく
る。

参

紀元二千六百年

唱和していたのは捕虫網を持った二人の昆虫採集者である。その名を仮に、
近衛と東条と名付ける。

あれよあれよと、事の成り行きを見守る兄妹。

〱正義凛たる 旗の下

明朗アジア うち立てん

力と意気を 示せ今

紀元は 二千六百年

ああ弥栄の 日はのぼる

と、謡い終えた二人は、各々に感動している。

近衛

東条

良いですねえ、紀元二千六百年……ねえ、東条君、そう思いませんか？

はっ！ やはり近衛さんも感動されましたか？

そりゃ、君、東条君……愛国者としては当然でしょう……何しろ、紀元は二千六百年なん

ですから……まさか、こんな森の奥で、『紀元二千六百年』の歌が聴けるなんて、ねえ……その昔、天照大神の孫におわす瓊瓊杵尊が天孫降臨を果たされ、やがて神日本磐余彦尊は神武天皇となられたのであります。以来今上天皇陛下まで万世一系の百二十四代、ついに紀元は二千六百年となったのです。

東条 近衛 ……なんか、涙、出て来やがるなあ、畜生！

何も泣く事無いんですよ、東条君。国史の教科書にだって書いてある事じゃありませんか？

東条 近衛 だって、泣けて来るんですよ、畜生！

久遠 ……あのう……

東条 近衛 あんた……泣かないのか？ 泣かないのか紀元二千六百年のために？

久遠 はあ、その……

すみません、私共は大切な御奉公があつて、こんな森の奥に入ってきたんですけれども、ここんどこ何日か、聞こえるのは何やら変な音ばかりで……人の声、それも『紀元二千六百年』だなんて、もう感動しちゃつて……愛国心の発露です。連れの失礼な態度は、どうか御容赦願います。

久遠 ああ、いや……それよりですね……

近衛 申し遅れました、私、近衛と申します。こちらは同僚の東条です。

東条 ま、宜しく。

久遠 はあ……どうも……

御覧の通り、昆虫採集に来たんです。と言っても、遊びじゃない。まあ、これも大切な御奉公の為なんですよ……失礼ですが、貴方は？

久遠 あっ、失礼、私……（と、あちこちのポケットから名刺を探し）こういう者で……

近衛 はい、恐縮です……ほう！ 帝都競技新聞、ですか？ 帝都と云うと……

東条 赤新聞ですよ。

莫迦だね、東条君、誤解を招くような云い方はお止しなさい。君、意味が判つて云つてるんでしょうね？

東条 近衛 えっ、だから……赤の、新聞でしょ……？

違う、違いますよ東条君。暴露物の新聞です。赤の新聞って云ったら、政治的に聞こえちゃうでしょ。だからですね、昔、赤い紙に印刷された暴露専門の……あ、失礼、こんな事どうでも良かったですね……

久遠 いや、良いんですよ。当たらずと云えども遠からずつて所ですから。

近衛 いやあ、御謙遜ですよ、えええとお、これは増渕……ひさ……ん？

久遠 クオンと読みます。

ああ、久遠さん……何年前か、ほら、ありましたよねえ、治安維持法で解散処分になった変な宗教団体の記事……

久遠 火本教？

ええ、そうでした、火本教です、はい。私、毎日読んでましたよ。まず、あれですよねえ、連中がその、帝都の井戸に毒をまいたという……

久遠 という噂、についての記事です。

えっ、あれ噂だったんですか？ 私達、てつきり本当にまいたんだと思つてましたよ、ねえ。で、あの記事で教団が注目されたんですよ……確か……

久遠 ええ、良く覚えてますよ。あれ、僕が書きましたから……

近衛 貴方が？ いやあ、これは光栄だなあ……

久遠 はあ……どうも……

あの教祖、相当な変人ですよねえ……戯けた預言だか何だかを、有ること無いこと云つて

近衛

ましたよねえ。なんですか……東雲のオ……

久遠 「東雲の空に輝く天津日の、豊栄昇る 神の国、やがては降らす雨利加の、数より多き迦具槌に、打たれ砕かれ血の川の……」というあれ、ですか？

近衛 ……そうですね、よりよって、この帝国に亜米利加の爆弾が降り注ぐと云うのです。とてもない、戯言と思いませんか、貴方？ だろう、東条君。

東条 そうですよ。全く持つて怪しからん！

近衛 何しろ、この国の紀元は二千六百年、世界に冠たる不滅の神州ですからね……それに比べて亜米利加の太陽暦はたかが千九百四十年、建国に至っては独立宣言からたったの……

東条 百六十四年！

近衛 その通りですよ。そんな駆け出しの毛唐の国に、何だつてこの神州が……しかも爆弾を意味するのに迦具槌という言葉を使ったのは、皇祖の源とも云うべき、伊邪那美命の命を奪つた、火之迦具土神に準えての事です。よりよって、連中はこの火之迦具土を御本尊として奉つていと云いますからね……これだけでも、不敬罪だ。そう思われませんか？

久遠 それは、まあ……

近衛 おっと、失礼……火本教には貴方の方がずっと、専門でしたよねえ。何せ帝都競技でもんねえ……英語で言えば、トオウキョウ・スポオウツ、とでもなりますか……

久遠 ……あの……

近衛 はい？

久遠 だからですね……

東条 近衛さん……

近衛 あっ、そうか！ これはこれは失礼いたしました。逢い引き、密会、所謂おデートの最中だったんですね。分かりました。邪魔者はもう消えますから、はい。

久遠 いや、違いますよ……つまりですね……

近衛 いやいや、良いんですよ。何しろその昔、皇祖皇宗の源、天照大神をお生みあそばした伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神は「成り成り而成り餘れる処」を以て「成り成り而成り合わ不処」に刺し塞ぐという『美斗能麻具波比』、即ち男女の媾合をもって、この日の本の国を産み作りたもうたのです。で、ありますから男女の営み、いや付き合いは、これ須らく神聖不可侵に行われるべきなのです。いやいや、御邪魔しちゃつて、ホント……

浅葱 ……

久遠 いや……だから、そんなじゃありません……

近衛 思えば、その国産みの最後に生まれて来たのが火之迦具土神……これにホトを焼かれて、伊邪那美命は尊き命を落とされ、黄泉の国にまいられたのです。伊邪那岐命がそうされたように、我等も火之迦具土の首を跳ね、もつて皇国の……

東条 近衛さん。

近衛 あっ、失礼。消えます消えます、はい……

久遠 いえ、そういう事じゃ無いんですよ。これは義妹なんで、僕らは別に……

近衛 ……はあ、と、云いますと？

久遠 つまり、その……僕ら迷つてしましましてね、森の出口を教えて頂けないかと……

近衛 はっ？ 今、迷つた、と仰いました？

久遠 ……はい、実は……

近衛 いやあ、それはいけないなあ……ここはいわゆる、樹海と云われる所です。樹の海と書く樹海……迂闊に踏み込むと出て来られないと云われています。

東条 怖いよねえ……そんなんじゃあ行方不明になつて、自分が記事になっちゃうじゃない、ブンヤさん。

久遠 ええ、ええ、それで困つてるんですよ。

久遠 ……

近衛　そう……それはお困りでしょうな……また、どうしてもこんな所までいらしたんです、危険な事この上ないなあ……

浅葱　……
近衛　そうですね……東条君、あれを。
東条　はい？

近衛　先刻、拾ったでしょう、磁石ですよ。あれを分けてあげなさい。私達は一つ有れば事足りるんですから……ここから、真つ直ぐ北へ行けば、多分、県道に出られる筈ですから……

東条　あつ！……近衛さん、これ、なんかクルクル回ってますよ。
近衛　そんな、莫迦な事……あれ？
東条　ね。

近衛　私達のやつを出してごらん。
東条　はい……あ、これも……

近衛　……どーも、お気の毒でした……どうやら、お役には立てないようです。
久遠　と、云う事は？
近衛　ええ、私達も、迷った……と云う事になります。

浅葱　……
近衛　お気の毒です……本来なら、お送りして差し上げたいんですが、私どもはまだ御奉公が……

久遠　御奉公？　例の昆虫採集ですか？
近衛　ええ、その……生態系の調査と云いますか、まあ分布調査みたいな物なんです。ねえ、

東条君。　そうそう、これがまた、とんでもない害虫なんだよね。まあ、滅多に居ない蝶々で赤い羽根を広げて、ひらひらと……

近衛　まあ、絶滅寸前ではあるんですが、こいつらが繁殖するのは、いかにも拙い。で……
久遠　絶滅寸前の、赤い蝶々で、害虫……？

東条　国家の存亡危急に関わる事なんだよ、これが！
近衛　ええ、その繁殖地を突き止めて、根絶やしにせねばならんと、まあそういう次第で……

久遠　根絶やしして……可能ですか、そんな事？
東条　俺達はね、そういう訓練を受けてる訳だ。でもって、使命を完遂するという信念をもって

東条　やってる訳よ！
近衛　まあ、つい先だって、その赤い蝶々を三匹、すんでの所まで追いつめたんですが、生憎

と雲が流れたのか何なのか、辺りが真つ暗になりました……
東条　逃げちやっつたんだよね、これが……
近衛　私共としましては、あの三匹を野放ししておく訳には行かんです。

久遠　……困ったな……どうする？
浅葱　……兄様、私……

近衛　一つこうしましょうか。東条君、なんとか、君、送って差し上げてくれませんか。
東条　えっ！　俺、独りで……ですか？

近衛　決まってるでしょう。二人で行ってしまったら、捕獲を続けられないじゃありませんか。
東条　そ、そんな事云ったって……

近衛　ね、頼みましたよ……どうも、あんまりお役に立てないで。まあ、この男も一応その道の
東条　専門家ですから、なんとかなるでしょう。くれぐれも、お気を付けて。火本の残党が潜伏し

近衛　てるって噂もありますからねえ……
久遠　残党……火本の？

久遠　おや、御存知ありませんか？　まあ、噂みたいな、モンですけどね……では、御機嫌よう。

近衛　……

東条 あっ、近衛さーん！

と、近衛、行ってしまおう。

東条 慥然として近衛の行った先を見ている。

東条 ……つたく、面倒な事は、いつだって俺なんだからな……

久遠 どうします……

東条 ああ……

久遠 とりあえず、我々も歩きます？

東条 他にどうするってんだ！

久遠 ……まあ、そうですね……行こうか？

浅葱 ……はい……

と、並んで歩き始める三人。

久遠 その赤い蝶々なんですがね……

東条 ああ。

久遠 赤いつて事は、立羽蝶の仲間ですか？

東条 ……

久遠 でもタテハチョウ科の食草つてのは、スマレとかイラクサでしょう。それ程の害虫とは、とても思えないんですが……

東条 ……あんた……詳しいの、そっちのほう？

久遠 いや、子供の頃、一寸ね……なあ、いたっけかなあ、そんな蝶……

浅葱 ……

と、声をかけた途端、俯いて立ち止まる浅葱。

久遠 どうした、浅葱？ また気分が悪いのか？

浅葱 ……すみません、一寸だけ……

東条 何だよ、何なんだよ、もう。勘弁してくれよな。

と、木霊の響きが再び。

東条 ……なあ、あれ、何だろうね？

久遠 僕に訊いたって判りませんよ。

東条 ……おい、なんか怖くないか？

浅葱 ……

久遠 そんな事云ったって……なあ……

東条 ……ウワーツ、近衛さーん！

と、駆け出して行ってしまおう東条。

久遠 あっ、一寸、東条さん！

浅葱 兄様……良いじゃありませんか。

久遠 だって、お前……

浅葱 ……嫌いです、あの人達……
久遠 ……

と、背後に化蝶の影が朧気に……

紋白 止めましょう、姉様……この勝負、無しにいたしましょう。
揚羽 どうして……今は貴女に分があるというのに？
紋白 だって……気になるのですもの……
揚羽 ……そうね。
紋白 ええ。
揚羽 ……迎えに行っておあげ。
紋白 はい。

と、木々の間に見えていた化蝶の姿が消える。

久遠 害虫で絶滅寸前の赤い蝶々が三匹に、火本教の残党、か……
浅葱 ……兄様？
久遠 いや、考えていたのさ、色々……おい、そんな蝶々を見たか？
浅葱 いいえ……見ていたのは……
久遠 うん？
浅葱 深山鴉揚羽が一头、それから紋白蝶が一头……
久遠 ……そうか、思い出したぞ！
浅葱 えっ？
久遠 お手柄だな、浅葱、良くその教え方を覚えていてくれた。
浅葱 忘れる筈がありません。だって……
久遠 成る程な、そういう事か……

と、背後の木々の間を、顔の無い化蝶紋白が、緩やかな舞を舞うように翔んでる。

浅葱 あっ……蝶々が……
久遠 紋白蝶……幼虫の食草は油菜科、そして最もキャベツを好む……行こう！
浅葱 えっ？
久遠 思い出したのさ……蝶の飛ぶ近くには幼虫の食草があるのが普通だからな。ひよっとして、キャベツ畑でもあるかも知れん……さあ、頑張って！
浅葱 兄様！

と、久遠、蝶の後を追う。少し遅れて、浅葱が続く。
化蝶紋白の緩やかな舞が続く中で暗転。

四 木濡雨

と、化蝶紋白が緩やかに舞いながら、舞台中央の先端まで進む。彼女はそこで方立膝の姿勢をとり、ゆつたりとした羽ばたきを続けている。
と、その後を追いながら進む五人の男女の姿がある。久遠、浅葱、露木、葛城、翠である。
人々は全て正面に向き、黙々と歩き続ける所作が続けるが、紋白が一同を翻弄するように飛び回ると、見失うまいとした人々が、必死に彼女の後を追って、その位置や前後関係が時折入れ替わる。それが樹海の中を進む人々の距離や位置関係を示すものとなる。
目下の所、久遠と露木が並んで先頭を歩き、少し遅れて浅葱と翠そして殿を葛城がつとめている。

露木 どれぐらいですか、可能性は？
久遠 何が？

露木 ……紋白蝶の行く先にはキャベツ畑が有る、とかいう……
久遠 ……今は、賭けてみる他ないでしょう。このまま日が暮れば、野宿って事になりますからね……

露木 確かに……（振り返って）続いているか？
翠 はい。

葛城 大丈夫です。

露木 霧が出てきたようだ。声を掛け合って行こう。
はい。

久遠 御迷惑をかけますね……
翠 いいえ。

浅葱 ……
久遠 友人を訪ねる途中だと仰いましたね？
露木 ええ……南満に行こうと思いましたが……

久遠 南満……満州ですか？

露木 はい、旧師が鉄工所の監督をしています。そこを頼ってみようかと……で、友人が貨物船に乗れるルートを紹介してくれそうなんです。

久遠 戦争、続きそうですね……鉄工所なら幾らでも仕事があるでしょう。

露木 ええ、まあね……貴方は妹さんを……

久遠 はい……いつ赤紙が来るか判りませんから……
露木 嫌ですね。

久遠 は？
露木 ……そんな世の中ですよ……

と、紋白がすつくと立ち上がり、飛翔の方向を変える。
殿の葛城がそれに気付いて、「あつ！」と声を上げた。蜘蛛の子を散らすように行方を追う一同。紋白の位置が定まると、迷い人たちの歩みも再び落ち着いた物に戻る。
翠と浅葱が先頭に入れ替わっている。

翠 大丈夫？

浅葱 はい。

翠 ひよっとして……月の物が？

浅葱 ……
翠 恥ずかしがる事は無いのよ。大丈夫、お兄さまにも聞こえないわ。
浅葱 ……違います…すみません。
翠 ……こんな事、前から？
浅葱 ……
翠 ……いいわ。云いたく無いのなら。
浅葱 すみません。
翠 お兄様とは、あんまり一緒に暮らさなかったのね。
浅葱 はい。でも…
翠 え？
浅葱 小さい頃は、いっぱい遊んでくれました。
翠 ……そう。
浅葱 あっ！
翠 何？
浅葱 ……
翠 云って御覧なさい。
浅葱 霧島さん。
翠 翠でいいわ。
浅葱 ……翠、さん。
翠 はい？
浅葱 翠さん…ブルーのストッキング…
翠 ……
久遠 あっ？

葛城と久遠が先頭に…露木は殿に下がった。

葛城 増淵さんはどうして記者になったんです？
久遠 歴史が好きだったのさ…書き続けければ、それは歴史の一部だろう？
葛城 赤新聞に書く事がですか？
久遠 ……
葛城 すみません…言い過ぎでした…
久遠 良いさ。俺は君達のように帝大を出なかつた。だから赤新聞しか行き場が無かつたのさ。
葛城 ……
久遠 俺の親父は兜虫の標本を集めていた。俺はその真似をして虫捕りに勢を出したのさ、子供
葛城 俺の頃…あれは…
久遠 ……
葛城 ……だが、いつか、俺は気が付いたのさ。一生をかけても、全ての虫は集め切れまいとね。
久遠 それから俺の興味は別の方向に向いて…
葛城 増淵さん。
久遠 あ？
露木 歴史は書く物じゃ無い。作る物ですよ。違いますか？ 僕は記録するのもされるのもまっ
久遠 びらだ。たとえ、どんな形でもね…
露木 ……文学的な云いようだね、君…
久遠 あっ？

と、今度は露木と翠が先頭に立ち。浅葱を庇う久遠が殿に立った。

露木

どう思う？

翠

ええ、違うと思います。具合の悪い女の子を隠れ蓑に使うとは思えません。

露木

多分な……だが油断は禁物だ。本物のブンヤなら、それはそれで厄介だ。

翠

はい。

露木

葛城だ。一番ボロを出すのが心配なのは……

翠

純粹ですからね。それは、いけない事では無いと思います。

露木

だから困るのさ。

翠

嫌いです……そんな言い方……

露木

俺だって嫌だよ。だが、そう云わざるを得ないのが、我々の現状だ。

翠

ほんと……嫌だわ……

久遠

あっ？

と、浅葱と葛城が前に……

葛城

疲れない？

浅葱

はい。

葛城

元気だな、浅葱ちゃんは……俺はもうへとへとだよ。腹も減ったし……

浅葱

本当は……少し、私も……

葛城

そうか……でも、顔色は良くなったよ。先刻より、ずっと。

浅葱

……あのお……

葛城

何だい？

浅葱

召し上がりますか、これ？

葛城

金平糖か！ 頂くよ。

翠

あっ？

と、久遠と翠が前に……

翠

どうして、一緒に住んであげないのでですか？

久遠

ま、事情は色々ね……

翠

そんなに子供じゃありませんよ、浅葱ちゃんは……

久遠

だから困る事だってありますよ。

翠

そんな……

久遠

……

翠

御免なさい。差し出がましい事を云ったかもしれませんがね。

久遠

いや……あれとは血が繋がっている訳では無いのです。

翠

？

久遠

親父が死んでから、母は二度添いになりましてね。浅葱は向こうの連れ子です。

翠

……増淵、というの？

久遠

実の父の名です……浅葱の姓は斑谷といって、あの一族は……済みません……

翠

……立ち入った事を訊きましたね。御免なさい。

久遠

良いんです。仕事柄、人からは何でも聞き出すんですが、自分が訊かれるとなると嫌なも

のだ。

翠

……

久遠　で、貴女方三人は？
翠　えっ？ ええ……
久遠　すみませんでした。止めましょう。
翠　すみません。
久遠　謝ってばかりですね、僕ら。
翠　そうですね、ええ……
浅葱　あっ？

と、葛城と露木が先頭に……

葛城　どうなるんです、露西亜に行つて？
露木　負けて逃げるんだと、そう思っているのか、お前は？
葛城　いえ……
露木　なら、何だ？
葛城　嫌いなんです、スターリンが。
露木　迂闊にそんな事を云うな。
葛城　大丈夫ですよ。聞こえやしません。それに……そもそも、僕らはインターとは違う。
露木　俺が云つてるのは、そういう事じゃない！

と、二人、一瞬後ろを振り返つて。

露木　……お前が、そういう名前を平気で口にする事だ。思っているのはかまわんが、口に出せば何が起るか判らん。
葛城　まるで観念論ですね。思っているのは構わない、か……
露木　言葉尻をとつて俺に噛み付くのはよせ！ ……俺は今、哲学を論じていることよりも、我々三人の安全の方が重大事だと思うがな……
葛城　……同意します、その点については。で、跳ねつ返りとしては、沈黙する前に、もう一つ危ないことを訊いておきたいんですがね。
露木　……何だ……
葛城　どうなつたと思えますか、同志Tの事です……
露木　トロツキー、か？
葛城　ええ。

と、久遠と浅葱が、ほぼ後ろについて。

久遠　……消された、という噂です。
露木　！
葛城　……増淵さん？
久遠　黒幕は不明ですが、恐らく……
葛城　……
露木　……

と、久遠と浅葱が前に。久遠は少し前を歩く。

久遠　もう、いいのか？

浅葱 はい。
久遠 なんとか頑張ろう……野宿はごめんだろ？
浅葱 ……
久遠 浅葱、あの人達の事だが……
浅葱 えっ？
久遠 この森を出たら忘れる。
浅葱 兄様、何故？
久遠 いいから、そうしろ。ん、雨かな？ まいったなあ……

と、葛城が久遠に駆け寄って。それを更に、露木と翠が追う。

葛城 増淵さん、貴方？

よせ、葛城！

先だつて、おかしな二人組と会いましたよ。

何？

久遠 絶滅寸前の害虫を捕獲して、根絶やしにするのが任務だと自称していましたが。赤い蝶々を三匹、すんでの所で逃がしたとか……

自称？

久遠 ええ、本物の玄人なら、三匹と云わずに三頭と云った筈だ。鱗翅目……蝶だの蛾だの数は方は、学術的には一頭、二頭ですから……気を付けた方がよい。

増淵さん？

……良いじゃないですか、ここを出るまでの事です。

……

あ……

と、やがて一同が並んで……

久遠 ほら、森が切れる！

葛城 有り難い。

翠 助かったの？

露木 なら良いんだがな……

と、足を早める一同。化蝶紋白、急速な舞を舞って消える。

と、明かりがさして、足を止める一同。

露木 何だこれは！

……綺麗……

浅葱 信じられない……森の真ん中に、ポツカリと花畑だなんて……色とりどりの花々に蝶々が乱れ飛んで……

葛城 桃源郷ですね、まるで……

久遠 やっぱり、文学的だな君は。

……

露木 どう云うことだ？

……ええ。

久遠
葛城
久遠
露木
浅葱
久遠
翠
露木

この向こうはまだ森だ。何てこった。
あれは、家……家ですよね？

そのようだな……行ってみますか？

……うーむ……

……

どうした、浅葱？

まあ、酷い熱が……露木さん？

……行こう。背に腹は代えられん……女連れだしな。

と、顔を見合わせて前進を始めた一同。舞台奥の扉が、次第に際だって明るく見えて行く。

と、息を呑む一同の前で静かに扉が開いた。

そこには喪服を着た姉と、死に装束の妹が立っている。

揚羽と紋白である。

揚羽

どうなさいました？ 道に迷われましたか？

紋白

おかしいわ、姉様。もともと道なんて無いんだもの……有るのは迷子の一本道。

揚羽

濡れてしまわれましたわね。お入りなさいますか？

紋白

入れてあげて。もう日が暮れる……それに、雷が近いわ。

揚羽

おいでなさい。何もありませんが、雨露をしのげる屋根があります。

と、遠雷が鳴る。彼らに選択の余地はなさそうだ。

揚羽

私は揚羽。

紋白

私は、紋白。

激しい雷鳴が一つ。重なるように反響する木霊とともに暗転。

五

さんた丸や御艱難の事

雷雨の中で、昆虫採集者、近衛と東条の声が響いている。辺りは闇に包まれていて、近衛の声は一定しているが、東条の声は、あちこちから聞こえる。

東条

ブワーツ、たまんないっすよ、近衛さん。うわーっ、真っ暗！ おわーっ、ずぶ濡れ！

近衛

落ち着くんですよ、東条君。まずはカッパを出してごらん。

東条

えっ？ 河童？ そんなモンがいるんですか？ 怖いよお……

近衛

違あう！ 雨合羽です、ポンチョですよ東条君。

東条

えっ、何ですって？ 怖い、怖いよ近衛さん！ ワーオーワーツ！

近衛

仕方が無いねえ、もう……今そっちへ行っただけですよ。

東条

ウワーツ、オワーツ、近衛さん、早くウ……

近衛

こら、動き回るんじゃないってば……すぐ行きますから、大きな声を出していなさい。

東条

えっ……どうしよう……何を云ってましようか……？

近衛
東条

歌を謡うんですよ、ほら、大きな声で……
うんと……えつと……雨々降れ降れ母さんがあ……

と、怒鳴るように歌い続ける東条。落雷がその声も掻き消すだろう。と、
雨が上がる気配と共に、舞台の片隅だけが明るくなる。そこには、巨木の
下で、尚かつ大きな葉を傘代わりにして座っている生と智恵の姿がある。
智恵は、生の肩を枕に、静かな寝息を立てている。

(智恵を揺り起こして) 止んだよ……

……

……どうなるのかな……

帰りたいの？

……

あたしはイヤだな……

じゃあ、僕も帰らない。

お腹空いたなあ。

(饅頭を出して) 食べる？

うん！(と、受け取って喰う)

最後だからね、これで……

うん。

……どうなるのかな……

帰るよりはましよ……どうなったって……

溶暗。

六

邪宗門

化蝶の姉妹が住む邪教の館。その奥にある「開かずの間」から、うつすら
と灯りが漏れ、対座する揚羽、紋白の姉妹の影が映っている。

揚羽

慈悲の所作は十四有り。

紋白

始め七つは色身にあたる也。

揚羽

後の七つは、すびりつにあたる也。

紋白・揚羽

……色身にあたる七つの事。

揚羽

一つには、飢えたる者に食を与ゆる事。

紋白

二つには、渴したる者に物を飲ます事。

揚羽

三つには、膚をかくしかぬる者に衣類を与ゆる事。

紋白

四つには、病人をいたわり見舞う事。

揚羽

五つには、行脚の者に宿を貸す事。

紋白

六つには、とらわれ人の身を請くる事。

揚羽

七つには、死骸を納むる事、是なり。

と、「開かずの間」の前に立つ久遠の姿が浮かび上がる。

久遠

迷路を抜けた先には、また別の迷路があった。思ったよりも大きな館だ。俺達は自由に歩き回るのを許されている……唯一つ、姉妹の暮らしている奥座敷を除いては。ところが、いくら歩き回っても、その奥座敷というのが見つからない。俺達一人一人にあてがわれた部屋と、食事に使う表座敷との間をぐるぐる回っているだけだ。台所とか納戸とか云う場所も、一向に見当たらない……奥座敷を探すのは、秘密の匂いがしてブンヤ根性が騒いだけじゃない。朝食の席に浅葱が姿を見せなかったからだ……

揚羽

御気分が優れないようなので、朝餉は後ほど御部屋の方へお届けします。今は良く眠っておいででしたから。

久遠

揚羽はそう云ったが、浅葱は部屋には居なかった。

揚羽

妹さんは、奥座敷に居ますよ。私どもがお世話しやすいように、移って頂きました。

久遠

……

紋白

元気になるわ、雨が止むまでには……無理をしないで。この辺りには、沼があるのよ。雨の日にはまったく助からないの……

久遠

……翌日も、雨は止まなかった……

揚羽・紋白

……いやましに御座ます御主、人は無事に栄え死人は不退の快樂に至る様に頼み奉る。代々を重ね、森羅万象を治め給い、万事叶い給う御主、我等蒙り奉りたる万の御恩賞の御礼をなし奉る……

と、開かずの間の灯りが消え、姉妹の姿も消えて行く。同時に舞台全体が

薄ぼんやりと明るくなる。

と、そこは久遠に与えられた居室である。

と、室外から葛城の声。

葛城

増淵さん。葛城です。

久遠

はい。

葛城

お話が有るんですが、入っても宜しいでしょうか？

久遠

どうぞ。

と、入って来る葛城。翠も居る。

久遠

まあ、座って話しましょうか……？

翠

……

葛城

……

久遠

……何でしょうか？

葛城

増淵さん……単刀直入にお訊きする。我々の素性については、察しが付いているんでしょう？

久遠

まあ、薄々はね……共産党、という訳でも無さそうだが……

翠

私達はクロポトキンを支持します。

葛城

霧島さん？

翠

ただ、現在の情勢下では、左翼勢力の大同団結の必要は認めています。

久遠

成る程ね、無政府共産か……大杉栄だな。で、今度は大陸へ行って毛沢東とでも手を組むんですか？

翠

露西亜です。ソ連は国際革命の拠点ですから……

葛城

そんな事まで云わなくても……
良いのよ……今更、隠し立てしても仕方ないわ……

翠

で、僕にどうしろと云うんですか？

久遠

……貴方達は「火本教」のスキャンダルを書き立てて、国家がああ教団を弾圧するきっかけを作った。それは良い。元々、宗教は大衆の麻薬なんだから。だが、我々は違う。

葛城

どう違うんだ？ 国体をひっくり返そうとして、治安維持法に問われているのは同じだ。違うのは、金科玉条としているのが、お筆先の預言か資本論かって事ぐらいだろ。

久遠

僕は貴方に、帝国主義の提灯持ちを止めるなんて云うつもりは無い。ただ、見逃してくれと頼んでいるだけだ。

翠

そんな風には聞こえなかったな……

久遠

増淵さん……

翠

私はいつか人間が……ええ、人民ではなく、人間が開放される時が来るのだと信じます。

葛城

いえ、……信じたいだけかも知れませんが……

翠

もう良い……止めよう……

久遠

その為の近道を探して、実は迷っているのかも知れません……ただ、今はそっとしておいて欲しいのです。

翠

そう云って来いと云われたんですか？

久遠

いいえ……私が葛城さんに提案しました。あの人は知りません。

翠

何故？

久遠

貴方なら解って下さると思っただから。

翠

……

久遠

浅葱さんは、私がブルーのストッキングを履いていると云って……青鞥の事は貴方が……

翠

……

久遠

いえ……あれは、僕にする事に、何でも興味を持ちますから……

翠

ならば、それは同じです。

久遠

買いかぶりですよ……霧島さん、僕だって皇国史観を鵜呑みにしてる訳じゃない。だが、だからといって、革命の先に約束の国が有るだなんて、無邪気に信じる気にはなれないんです。

翠

……

久遠

まあ、良いでしょう。浅葱にも云って有ります。貴女方の事は忘れる、と……深い森の中で見た夢だと思いう事にしましょう……

葛城

訊かせて下さいよ、貴方の倫理の置き所を？

久遠

……そんな物は無いよ。大衆が大東亜共栄圏の繁栄を望むなら、それも民主主義だと考える他は無い……そういう事かもしれない……

葛城

それは日本の支配階級の勝手な理屈に過ぎないでしょう。殴られた方は、いつまでもその事を覚えていますよ。

久遠

僕はその責任を回避しようとは思わない。

翠

だったら……何故？

久遠

後悔しているんですよ、色々ね……

葛城

……

久遠

治安維持法で捕まった連中……君達とは多少立場は異なるだろうが、佐野や鍋山が転向して以来、多くの者が獄中で主義を投げ出している。火本はどうだ？ こっちはまるで転ばない……世間の人々は、そんな奴らを気味が悪いと感じている。それは、君達に対しても同じだ。だが、同時にこうも思っているんだ。ひよつとして、あれは濡れ衣だったかも知れない

久遠

……

葛城

……

久遠

……

久遠

……

と……

翠 火本教の教義については、良く知りませんが……建国神話を曲解した、という事で迫害を受けるなら、それは不幸な事だと思います。その点、私達は確信犯だという事になるのでしようね。

葛城 国粹主義と迷信が対立するのは内輪もめみたいな物ですよ……しかし、きつかけを作ったのは貴方達だ。

久遠 その通りさ。だから、犬は一生犬を貫くしか無いかもしれん。だとしたら、君達を密告するか、特ダネにするのが正しい立場だ。

翠 でも、それはしないと仰有るのでしょうか？ だったら……

と、露木が入ってきた。

露木 止せ！ ……所詮、反動の側にいる奴に、何を云っても無駄だ。

翠 露木さん……

露木 雨が上がったぞ。支度をしろ。明日の朝、ここを出る。

葛城 ……はい。

と、葛城、出ていく。

露木 妹さんが臥せっているのに乗ずるようで気の毒だが、俺達は先に出る。

久遠 抜ける自信は？

露木 それは判らん……しかし、淫祠邪教の巢窟に長居する気は無い……

久遠 何だつて？

露木 ……俺は……恐ろしいモノを、見た……

久遠 入ったのか、奥座敷に……？

と、奥座敷の内に、再び灯りが灯る。揚羽、そして対座しているのは紋白ではなく、浅葱かも知れない……蔽かに駒音……いや、木霊が響いている。と、消えていく奥座敷の灯り。

露木 ……君の好意には感謝する……理解してもらおうとは思わんがね。

……

と、露木、去る。

翠 増淵さん……出来る事はあるはずですよ。

久遠 増淵というのはね、転び伴天連の血筋なんですよ……判りますか、僕の云いたい事が？

と、紋白が入って来る。

紋白 あの……夕餉の支度が……

翠 ……ありがとう。

と、翠、出ていった。

久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白

……浅葱はどうしているのかな？
姉様と一緒に

一寸、話してもいいかな？
はい。

君達姉妹は、いつからここに棲んでいるのかな？
もう、随分昔なので、良く覚えていません。姉妹になった日から、ずっと。
どうして、こんな人里離れた所に？

私は子供なので、良く解りません……「邪宗門の廉で都から落ちて来た」と聞いています。
……

久遠さん。邪宗門というのは何ですか？

……

急速に暗転。

七

天正歌留多之事

表座敷で対座している久遠と紋白。奥には、奥座敷で対座する揚羽と浅葱の姿の影が映っている。化蝶の姉妹と現世の兄妹は、それぞれに対角線を描く位置関係にある。

と、姉妹がそれぞれに手にしたタロット・カードをめくり、兄妹の前に並べていく。浅葱と揚羽の姿は、花札かトランプのような、遊戯に興じているように見えるだろう。

これは、ぶるでんしや……

賢慮の札。

これは、じゆすちしや……

正義の札。

これは、ほるたれぎ……

剛毅の札。

これは、てんぺらんさ……

節制の札……四つあります、「かるである」の「びるつうです」でございます。

……

四大徳行か……奇態な札だな。これでお勉強でもするのかな？

いいえ、これは私の玩具。「たろつきい」という歌留多だわ。

玩具？

姉様に頂きました。

つまり、僕と遊びに来てくれた、という事か？

久遠が退屈していると思っただから。

ここには、新聞もラヂオも無いからな。

トモダチ、が居ないわ。みんな今朝ここを出ていったから……紋白が久遠の友達になって

あげても、良くつてよ。

……で、たろつきい、かね。

紋白
揚羽
紋白
揚羽
紋白
揚羽
紋白
揚羽
浅葱
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠
紋白
久遠

紋白

「天正の時代、南蛮より切支丹宗門、ギヤマン、カステラ、鉄砲と共に、『うんすんかるた』と申す物が伝来いたしました。うんすんはたるつきいより生じ、これが花札を始めとする、我が国の遊び札の祖であります」

……

久遠
紋白

久遠が邪宗門を教えてくれないと云ったら、これで遊んでおいでと姉様が云いました。ほら、これが、ばしゑんしや……

……忍耐……

揚羽

教材を使つて遊ぶのか？ ごめんだね。

久遠

キョウザイ？ 解らない。

紋白

徳の話なんか聞きたくも無いぞ。

久遠

徳、だけでは無いわ。えすぺらんさ……

揚羽

希望。

紋白

じゅすへる。

揚羽

天狗。

紋白

せさる。

揚羽

帝。

紋白

もるたる。

揚羽

……死。

紋白

こうして帝の上に重ねると……ほら、帝が死んだ。

久遠

……天下国家も掌の中か？ 聞く奴によっちゃあ、これだけでも不敬罪だ。

紋白

何故？

久遠

畏れ多くも天皇陛下は、万世一系の現人神、という事に世間ではなっているのさ。神聖不

紋白

可侵の現人神を、掌の中で弑し奉るとは、皇祖皇宗に対する逆賊の非国民という事だ。

久遠

解らない。

紋白

何が？

久遠

テンカコツカとフケイザイが解らない。バンセイイツケイとアラヒトガミが解らない。シ

紋白

ンセイフカシンとコウソコウソウとギャクゾクとヒコクミンが解らない。

久遠

「弑し奉る」というのは解つたのかね？

紋白

解らない。

久遠

つまりは、何一つ解らなかつた、という訳だ。

紋白

紋白は子供だから難しい言葉は解りません。

久遠

……

紋白

久遠には解るの？

久遠

世間ではどんな家にも御真影があつて、ラヂオからは勅語とか大本営発表とかいう小難しい言葉が流れて来るんだ。知らず知らずの内に、そういうことを覚えてしまう物なのさ。姉

紋白

様は教えてくれなかつたのか？

久遠

知らなくて今まで不自由しなかつた物を、わざわざ覚える必要が有るのかしら。

紋白

君には関係なくても、俺には飯の種だからな。

久遠

解らない。

紋白

……

久遠

私にはまるで解らない「言の葉」が飯の種だなんて、何がどうなっているのかさっぱり解

紋白

らないわ。世間とか云う所の人達に、それが解るだなんてインチキよ。

久遠

多分そうだろうな……みんな、訳の解らない物を、解つた振りをしているんだ。

紋白

……それは少し解る……だから、なのね……

久遠

何が？

紋白

……

久遠

何が？

久遠

何が？

紋白

邪宗門という言葉の葉の切れ端よ。「帝都の井戸に毒を撒いた……という噂」という言葉を読んで、「帝都の井戸に毒が撒かれた」と思い込んで、解った気になったり、水の酌み溜めをしたり、それから……村八分にしたりするんだわ。

久遠

……それは「火本」の事を云ってるのかね？

紋白

ヒノモト？

久遠

「火本教」だよ。チロチロと燃える火の本と書く火本だ。昭和十一年、雪の日に青年将校達が蹶起した半月後に、治安維持法で結社禁止を申し渡された火本教だよ。

紋白

解らない。

久遠

本尊として火之迦具土神を祀り、日出ずる国の国土、また皇祖皇宗の源須く火之迦具土大神の御血筋也と云って、邪宗門の廉で、帝都を追われた火本教だ。

紋白

君や姉さんが、隠れ切支丹の「おらしよ」だの「たろつきい」だので煙に巻いている火本教だよ……違うかね……？

久遠

紋白は子供だから難しい言葉は解りません。

紋白

……君は都合の悪いときには、子供になる。一体、君は幾つなんだ？

久遠

さあ……姉様と暮らした、今日までの年月だけ、多分……

紋白

……それは、いつから……

久遠

前にも云ったわ。姉妹になった時から。

紋白

それはおかしな言い方だよ。

久遠

そうかしら……久遠と浅葱はいつから兄妹になったの？

紋白

……

久遠

久遠と浅葱が兄妹になれるなら、私と姉様が姉妹で有ることに、何の不思議が有るというの？ これから、私が久遠の妹になったり、浅葱が私達の姉妹に加わったとしても、そこに不思議な事は何も無いわ。

紋白

！……浅葱は何処だい？

久遠

奥座敷だわ。

紋白

揚羽と一緒にだね。

久遠

はい。

紋白

具合はどうなんだ？

久遠

大分良い……もうじき、次の形に進む、そう姉様が云ったわ。

紋白

どういう意味だ？ 熱が退いたのなら、会わせてくれても良いだろう。

久遠

浅葱が会いたいと云ったらね……浅葱は姉様と居たいのよ。

紋白

……何だと？

久遠

……

紋白

ここで暮らしても良いと云ったわ。久遠もそう決心してくれば、いつだって浅葱と会えるんだわ。

久遠

何を云ってるんだ、一体……

紋白

私は久遠と浅葱の事が好きよ。きっと良い兄妹になれると思う。あの翠さんという人も好きだった……きっと良い姉妹になれたのに……だから、久遠はここに居て、浅葱と一緒に……

久遠

……

紋白

……

久遠 ……
紋白 興亜奉公とか、八紘一字とか、紀元二千六百年とか、そんな言葉があるんだわ。
久遠 ……俺は、そんなことまでは云わなかったよ……

と、奥座敷の揚羽と浅葱の影がスーッと立つ。浅葱は室外に外し、揚羽がキッと正面を向いた。

揚羽 紋白。
紋白 はい。
揚羽 御客様方がお戻りになりました。
紋白 はい。
揚羽 ……御案内して下さい……
紋白 はい。

と、紋白が立ち上がるのと併せて、奥座敷の灯りが消える。
と、振り向く紋白の前に、露木、葛城、そして翠が入ってきた。

紋白 お帰りなさい！
露木 ……
久遠 ……君達……？
葛城 どうにもならないのです。何処をどう歩いても、またここに来てしまう。堂々巡りだ。森が切れると、そこで花の香りがして……そうこうするうちに……
翠 舞い戻ってしまいました、また……
紋白 翠さん、嬉しい。

と、館の外で遠雷が聞こえる。
と、揚羽が現れた。

揚羽 ……御無事で……
と、やや近付いてくる遠雷。

揚羽 今夜も雨です。どうぞ、雨が止むまで……いえ、いつまでもこゆくりしていつて下さいませ。
露木 ……

溶暗。

八 青木ヶ原くずれ

と、舞台が明るくなると、そこは再び樹海の深奥である。
あの少年と少女……生と智慧が、向かい合って座りながら、餓鬼のように

乾パンや干し肉を食っている。

と、仁王立ちした東条がその二人を見つめ、近衛は傍らで背を向けて立っている。子供達の貪る食物は、この二人から与えられたのだろう。と、喰い終わり、奪い合うようにして水筒の水を飲み、大きく息をつく。

東条 ……喰ったか？

生 はい。

東条 飲んだか、ん？

生 はい。

東条 そっちは？

智恵 えっ……はい。

東条 ……そうか……

生 はい。

東条 この野郎！ はい、じゃねえだろ、コラ！

生 えっ？

御馳走様でした、とか、有り難う御座いました、とか、何か俺達に言うべきことがあるだろ！

生 あっ、はい！

東条 だからよ、はいじゃねえって言ってるじゃないか！ わかんねえ奴だな、この餓鬼どもは！ すみません、御免なさい！ あ、あの……御馳走様でした！

智恵 有り難う御座いました！

東条 ……そうだよ、それで良いんだよ。そんなじゃあ、軍隊入ってから、ビンタの嵐の後で、捧げ筒の反復三千回だよ。

生 ……

東条 おい、コラ一寸！ いつまでもノンベンダラリンと座ってんじゃねえぞ！ そら、立てよコラ！ この野郎！

と、二人、立ち上がって水筒等を東条に返す。

東条 いいか、俺の新兵時代には、こんなモンじゃ無かったんだぞ。そもそもだな、日本男児たるものはだ……

近衛 まあまあ、東条君、その辺で……相手は子供なんだし、ここは関東軍じゃないんですから……

東条 ……はい……近衛さんがそう仰有るなら……

近衛 その様子じゃ、もう何日も歩き回ったみたいですね。何をしてたんですか、こんな所で？

生 ……

智恵 ……

近衛 答えたく無いですか？

東条 この野郎、近衛さんの言う事が聞こえないのか？ 何してたんだよ、コラ！

生 ……

東条 まさか、あれかよ。駆け落ちだの、心中だのってのは大人のやる事なんだからな。お前らみたいなシヨンベン臭い餓鬼が……

智恵 ……でしょ……

東条 あんだあ？ 聞こえねえなあ！

智恵 関係ないでしょ、おじさんに……

東条 ……お、お、オジサン……？

生 その、そうだよ……お巡りさんじゃあるまいし……おじさんのくせに……

東条 !　こ、この野郎……俺はこう見えてもだなア!

近衛 あ、一寸、待ちたまえ東条君……

東条 俺はなあ、こう見えても去年満期除隊したばかりで、まだ二十代なんだ!　嫁さんだってもらってねえつてのに……言うに事欠いて、オジサンとは何だ!　物の言い方に気をつけないと体前支えを一時間やらせるぞ!

近衛 ……

東条 ったく、近頃の餓鬼と来たら、口の利き方も知らねえんだ。ココロの教育つてのが出来て

ねえんだよな、全く……そうでしょ、近衛さん?　そら、齒ア食いしばれ。俺が弛んだ精神に渴を入れてやる。

生・智恵 !

近衛 まあまあ、東条君、彼等も学徒なんだから話せば分かりますよ。しかし、君達も自覚を持

たなきやいけないなあ。皇紀紀元二千六百年のこの帝国が、大東亜共栄圏の確立という大目的の為に、満蒙開拓、興亜奉公に邁進しているこの時期に、人里離れたこんな森で逢い引きだなんて、健全な少年少女のやる事じゃありませんよ。分かりますか?

智恵 ……

生 ……あ……はい……

東条 それも、下の毛も生え揃わないような餓鬼共が、だ!　俺なんか、この歳になつても、まだ嫁さんも……

近衛 まあ何しろ、銃後の乱れは国を滅ぼす元になりますからね。それに、こんな所を彷徨くのは、甚だ危険だ。こんな所に来るのは、迷ったか、死にに来たかでなければ、良からぬ事やつて逃げてる連中……と相場は決まってるんです。我々が捕獲しようとしている害虫だけじゃない。世直し教だの、共産主義だのといった馬鹿げた考えに取り憑かれて、国家を転覆しようなどと考える連中もね。

東条 奴らおかしいんだ。今度の創氏改名にまでケチを付けヤガつて……後進国の奴らも天皇陛下の赤子として迎え入れようという有り難い御沙汰なんだ。それを奴らと来たら……おいつ、聞いてんのか!

生 はい!

東条 貴様、親に何を教わってきたんだ!　父親は何をやつてんだ!

生 ……死にました……盧溝橋で……

東条 軍人か?

生 中尉です。

東条 ……俺は一等兵だったよ!

近衛 兎も角、君達は早く帰った方が良い。私達に会ったから良いようなモノの、こんな僥倖はもう二度とありませんよ。

生・智恵 ……

近衛 随分と歩き回ったみたいですけど、一体、何を食べてたんです?

生 ……最初は、饅頭とかがあって……あとは、草の実とか、蝸牛とか……

東条 えっ、デンデン虫?

と、嗚咽し始める智恵。

近衛

……悲惨だなあ。我々の御奉公は確かに重大ですけど、これは、いくら何でもあんまりです
ねえ……東条君、君……

東条 　えつ、またですか？

近衛 　当たり前でしよう？　こんな年端も行かない子供達を樹海の中に置き去りにするなんて、人の道に反するじゃないですか。

東条 　……はい……

生・智恵 　……

東条 　おい、お前らなあ、俺達は大事な御奉公があつてだぞ、んでもってこんな森の中で何日も獲物を追つて足を棒にしてるんじゃないか。それをだな、お前らのような帝国臣民の自覚の欠片も無い餓鬼どもが彷徨いてるから、またまたすんでの所で逃がしちまつて訳よ。分かってんのか、コラ！

生 　……獲物？

近衛 　まあ、そうなんです、我が帝国の国家目標の障害となる害虫が、この辺りで未だに命脈を保っているというのでね……三匹の赤い蝶々なんです……

智恵 　赤い蝶々が……？

生 　三頭？

近衛 　サ、サントウ？

東条 　この野郎、牛や馬の話じゃねえんだよ！

生 　……だから……

東条 　蝶々蝶々葉にとまれた！

生 　だから、三頭でしょ？　鱗翅目の数え方は一頭二頭だから……

東条 　こいつ……俺に学が無いと思つて、ワザと難しい言葉を使つてんな！　ったく、何だよ、先刻からその態度は！　この野郎、齒を食いしばれ！　貴様のような奴はこの俺が修正してやる！

と、生に東条の鉄拳が喰る。吹っ飛ばす。

智恵が駆け寄るが、構わずに突進する東条。

智恵 　やめて！

東条 　この野郎、女の影に隠れるつもりか？　俺は許さんぞ、この野郎！

近衛 　東条君、何もそこまで……

東条 　止めんで下さい、近衛さん。こういう輩には言つたつて物の道理は分かんのです。言つて分かん奴はぶん殴つて分かんせるしか無いんだ。ぶん殴つても分かん奴は、獄にぶち込むかぶつ殺すしか無いんだ！　コラ、立てよこの野郎！

智恵 　やめて！　もう撲たないで！

近衛 　（後ろから羽交い締めにして）落ち着き給え、東条君！　相手は子供なんだ。大杉のシンプアでも、淫祠邪教の輩でも無いんですよ！

東条 　離して下さい。こういう、腑抜けた餓鬼には、今の内に分からせなさいかんのです。ココロの教育が出来てないから邪な思想が蔓延するんじゃないやありませんか！　何故それが分かんのです！

と、近衛を振り解いて、再び生に突進する東条。

東条

立て、この野郎！　俺がお前の親父と天皇陛下に恥じない男になれるように、ココロの教育つて奴をタップリとしてやるよ！　お前は日本男児だろうが。毛唐やチャンコロとは違うんだろ！　日本人なら、俺の拳骨の一発毎に、青少年学徒に賜った勅語を言つてみる……

あーっ、痛エーっ！

と、前腕部を押さえて飛び退く東条。生の手には切り出しナイフが握られている。

東条 うわーっ、こ、こ、近衛さん！ ち、血イがあ！

呆然としている近衛、そして生。

智恵 逃げよう！

生 ……う、うん……

と、樹海の奥に駆け出す生と智恵。

近衛 あ、おい、君達、待ちなさい！

東条 近衛さん、待って……血が、血が出る！ うがあ、痛エよ、コン畜生！ コ、ココロの教育だ……ココロの教育が出来てないからこうなるんだ……ウガガア！

と、近衛、仕方なくのたうち回る東条に駆け寄る。

近衛 コラコラ、我慢しなさい、今、手当てしてあげますから。関東軍の叩き上げ、東条一等兵の名が泣きますよ。

東条 ……有り難う御座います……近衛さん、先程はすみませんでした。
近衛 良いんですよ、もう。

東条 ……近衛さんは優しい……でも、それだけじゃいかんと俺は思います。
近衛 随分、ムキになりましたね。何か訳でも有るんですか？

東条 ええ……近衛さん、今だから告白しますけど……俺の親父、実は困民党のシンパだったんです。

近衛 ……
驚いたでしょう？ 赤だったんですよ、うちの親父は。そんな俺がですよ、なんとか真つ

当な人間になれたのは、お袋が親父の分も、ココロの教育ってヤツをしてくれたからだと思います。でも……

東条 ……
親父の事を赤新聞に脅されて……お袋は毎日泣いてましたよ……世間様に申し訳ない、御

天道様が見られないってね。お袋は云ってたモンです。良いかい、英樹、お前だけは、真つ

当に世間様を歩ける人間になんきやいけないよ、御天道様を真つ直ぐ見られる人間になん

なきやいけないんだよってね。僕アねえ近衛さん、お国に対して、いえ、世間様に対して親

父の償いをせにやあならんのです。でなきや、お袋が可哀想で……言って分らん奴は、ぶ

近衛 確かに君の言う通りですよ、君はそれで良いんです。だがね、東条君……その後で、ほん

の少し優しくしてやれば良いんですよ。人間なんて弱いモンです。逃げ道を作って踏み絵を

東条 踏ませてやれば良いんですよ。
近衛 そうでしょうか？
東条 そうですとも。切支丹が御禁制の時代、一番熱心に御上に御奉公したのは、どんな連中だ

近衛 と思いますか？ 転び伴天連ですよ。踏み絵を踏んだ転び伴天連が、御上の御用を勤めたの

です。

東条

近衛

……
だから君は奴らを精々可愛がつてあげなさい。丁重にね……その後で、私がほんの少し優しくしてやりますから。それでも改心しない奴は仕方がない……死して東亜の、世間様の礎となるのが当人の為でしょう。

東条

近衛

近衛さんはそう仰有いますけど、俺には……
大丈夫、大丈夫ですよ……私はよおつく覚えてますよ。佐野や鍋山の時もそうでした。赤い連中は、淫祠邪教の輩に比べれば、他愛の無いモンですよ。一寸の情けを掛けてやれば、得も言われぬ顔をするんです。転ぶ前の彼奴らの顔と来たら、何奴も此奴もみんなみんなおんなじですよ……ほらね、あんな顔をするんです。

と、近衛の指差す方を東条が振り向くと、木々の間から姿を現した男が独り。露木である。

暫し凝視しあう露木と近衛。意味深げに笑う近衛。

ゆっくりと暗転。

九

誘蛾灯

舞台の前面で、背中合わせに座っている久遠と翠。表座敷のようだが、二人の周囲だけがぼんやりと浮かび上がり、確かな事は判らない。

と、その背後には奥座敷の襖が開き、やはり三つ巴の背中合わせに坐る揚羽、紋白、浅葱の姿があるが、礼拝堂の中を思わせる彩りに包まれたそこは、表座敷とは、明らかに異なる時空に在る事を思わせる。浅葱は浴衣の上に着物や羽織を幾重にも着込み、蛹のような姿で、後ろの正面を向いている。

翠

久遠

翠

久遠

紋白

揚羽

翠

久遠

揚羽

浅葱

久遠

翠

久遠

翠

久遠

翠

久遠

会えましたか？

はい？

浅葱ちゃんです。

……いえ……

浅葱は奥座敷に居るわ、私達と一緒に。

私達は浅葱さんを隠している訳ではありませんよ。どうぞ、奥座敷にいらして下さい、久遠さん……

それで……？

探してみましたよ、勿論……だが、どうにも奥座敷というのが見つからないのです。貴女

方が、堂々巡りで、ここに帰って来たようにね。

道は開けます、時が来れば。

……今の私を兄様に見られたくない……お願い、あと少しだけ……

つまりね、僕にはまだ奥座敷に入る資格が無い……そういう事なんだと思いますよ。貴女

だったら……いや……

私はね……

え？

いえ……考えていたんです。私達、どうしてここに来たんだろうって。何故、堂々巡りで、

ここに帰って来るのかつて、そんな事を、ね……きつと、やり残した事があるのでしようね、ここで……

私は翠さんが好き。もっと聞きたい事が有る、もっと知りたい事が有る……もつと、もつと……

久遠 帰りたいと思いませんか？ いや、露西亞へ行くんですけどね、貴女達は……

翠 ……良かったのだと思います、露西亞でなくても、今にして見れば……

久遠 ……

翠 行きたかったんです、何処かへ……久遠さんは、帰りたいと思いますか？

久遠 思っていました、漠然とですが……しかし、何処へ帰るのかというと、それが……

翠 家、ではありませんね、多分……

久遠 ええ、多分……家は十年前に棄てました。そんな僕が今更、浅葱と……

翠 棄てた、というのとは？ ……すみません、聞かない約束でした。

久遠 いえ、かまいません。斑谷の家です。細川忠興の血筋とか云いましてね、つまりは侯爵様の縁戚なんだと、それを何度聞かされた事か……侯爵様の方は、繭商いと米相場で、二度破産した俗物の事なんか、与り知らぬ事でしょうがね……

翠 細川忠興というのは、確か……

久遠 ええ、切支丹大名です。そして僕には転び伴天連の血が流れている……尤も、義父の家はナムカラタンノトラヤーヤーでしたからね……何れにしろ、破産した父を見捨てたところで、僕は母も見捨てたんだと思いますよ、多分……

翠 ……似たようなものですね、みんな……何処かへ行きたくて、家を棄て、何処かへ行きたかったから、家に棄てられた……

久遠 貴女も？

翠 いつか、解ってくれる……信じていました。こんな私が戻っても、両親は迷惑に思うだけでしょう……今となってはね……

久遠 ……有るんでしょうか、何処かに？

翠 えっ？

久遠 還るべき所、ですよ。

翠 探していたのでしょうか、それを……探して、迷って……

久遠 迷って……

翠 ええ、この森に入る前から……とうに、迷って……

久遠 迷って……

翠 迷って……

久遠 迷って……迷って……

翠 えっ？

久遠 迷って……迷って……

翠 えっ？

久遠 迷って……

翠 迷って……

久遠 迷って……迷って……

翠 えっ？

久遠 迷って……

翠 迷って……

久遠 未踏の地には、道標も無ければ道も無い。在るのはただ……

翠 ただ……？

久遠 ただ……？

と、久遠と翠、共に立ち上がって……

奥座敷の化蝶達はゆつくりと翼を動かしている。

翠 餓えた心を満たす、何かです……きつと。

久遠 言い切れますか、それが誘蛾灯の灯りでは無い、と、そう……

翠 判りません……でも、翼焼かれて墮ちるなら、それも、また……
久遠 ……浅葱……

翠 居心地が悪かったんです、ずっと……家が、世間が寒いんです。そんな私を連れ出して、
久遠 此処ではない何処かへ……ええ、連れて行ってくれる人が欲しかったんです……

翠 翠さん。
久遠 はい？

翠 貴女には行き先が見えているんだ、多分……
……

と、二人は何かに向かって歩き出したように見えるが、突然の叫び声と共に、奥座敷の襖が急速に閉まり、表座敷の全体が明るくなって、通常の時空に戻る。

松石 常世

と、血相を変えて飛び込んで来る葛城。手には一度丸められた跡のある紙片が握られている。久遠の存在を見て一瞬躊躇したが……

葛城 霧島さん！
翠 どうしたの？

葛城 ……見てくれ。

翠 ……「露木裕輔以下三名、ここに左翼無政府共産主義よりの転向を表明し、以後、今上天
葛城 皇陛下、大元帥陛下の赤子として、八紘一字の国体を守護し奉り、大東亜共栄圏実現の御旗
翠 の許、忠節をもつて興亜奉公に邁進する所存で御座います」……これは？
……

葛城 ……「つきましては、忠勤の証として、貴殿らがかねて探索中である、火本教の残党、その
翠 所在をお知らせする次第で御座います。我等、陛下への絶対の忠誠と、皇国への御奉公を」
……

と、翠、その紙片を握りつぶした。

葛城 ……露木さんが居なくて……部屋に何度か書き直したらしい手紙のような物が……拡げて
翠 見たら、これさ！
……

久遠 ……転んだね、君達の指導者は……
葛城 黙れ！ あんたなんか……

翠 止めて……！ 止めてちょうだい……（と、静かに坐った）
……

久遠 どうするんです、これから……？ まあ、僕が尋ねるような事じゃないが……
葛城 ……

項垂れたように沈黙する葛城と翠。

と、そこに露木が入って来た。

露木

……

葛城 どういう事だ、露木さん？

露木 …… 読んだのか…… だったら、判るだろう。つまりそういう事だ。取引だよ。

葛城 何だと？

露木 解らんか、これは擬態だ。我々は帝国主義の中の細胞となって、これを内部から浸食し、崩壊させる。

葛城 嘘をつけ！ 犬のような真似をして、偽装転向だなんて信じられるかよ！

と、葛城、露木の胸倉を掴んだ。

露木

若造に何が分かる……！ 信じられんというなら、勝手にしろ。俺を肅清するなり、独りで亡命するなり、好きにすれば良いんだ。どっちも出来やしないだろう。お前は、昔から、俺の背中を見て付いて来る事しか出来なかつたんだからな。違うか。

葛城

……

翠 葛城さん……

葛城 ……

翠 仕方が無いわ……今は露木さんに従いましょう。

葛城 …… 糞オ！

と、葛城は露木から手を話し、床に拳を叩き付けた。

露木

奴らとの約束は一時間後だ。館の門前で待て。俺も直ぐ行く……文献なんかは、処分しておけよ。

翠 …… はい……

久遠 ……

露木 …… 俺を責めるか？

久遠 いや……責めるとすれば、それは俺じゃあるまい。

露木 ……

俺は気が変わった。初志を貫徹して、浅葱を連れて此処を出るよ。特高の奴らを待つ気は無。い。

露木 傍観して、論評する事しかない奴に、何が解る！ 貴様……！！

翠 露木さん！

露木 ……

翠 止めて下さい……

と、露木、出ていった。

久遠

……

翠 …… 会えるでしょうか、また……

久遠 会えるでしょう、そう望んでいれば、多分……

翠 ええ、そうですね……多分……

久遠 お元気で。

翠 貴方も……御機嫌よう。

と、久遠も一礼して去った。

霧島さん。

……

……翠さん……

……ええ……

露西亜へ行こう。

……

俺が守るよ……だから、露西亜へ……

……

いや、別の方法論だってある筈だ。確かに、そう、今日の世界は発狂している。我々の拠点となり得る国なんか無いのかも知れない。しかしだ、つまり、だからこそ、俺達は継続しなくてはいけないんだ……だから……俺は、日和のは、もう……嫌だ！

……葛城さん……

……どうして、どうしてこんな惨めな結末を迎えなくちゃならないんだ。俺達のやって来た事は……

楽しかった……ねっ……？

えっ？

不謹慎ね……でも、そう思うのよ。命がけで、楽しんでいたのよ、私……

……

でも、疲れちゃったなあ……ねえ、私達、露木さんと出会ってからこっち、馬車馬のように走って、信じて、逃げて、迷って、挙げ句に……何だか、とても……

俺は、俺はまだ走れる。君がいるんなら……

……

そりゃあ、俺にだってあつたさ、云い知れない不安に駆られる事だって、弱気になる事だって……特高の拷問だって何だって、耐えられる……そう思っていた気持ち揺らいで、これを……(と、手の中に小さな薬瓶)

……それは？

(静かに頷いた)

！……駄目よ、そんな事！

だからさ……行き着ける所まで行こう、一緒に……！

……ありがとう……嬉しいのよ、私、本当に……でも……

……

立ち止まってみることにしましょう、少しだけ……それで本当に転んでしまうのなら……私達もそこまでだったという事よ……

……ああ……

生き延びる事を考えましょう、今は。その後で、また……

……分かった。

これは預かっておくわ……駄目よ、変な気を起こしちゃ……

と、葛城、頷いて出ていく。風が吹く。崩れていく表座敷の風景。と、その中に佇立する翠……開かずの間に浅葱の影が映り、『さすらいの唄』が聞こえている……化蝶の姉妹が、翠の鞆、羽織等の荷物を持って交差する。

と、彼女らが去ると、樹海の入り口の風景が開け、旅支度を整えた翠が、

佇んでいる……第壹場の風情と同じように……
と、そこに同じように旅支度に身を包んだ露木が……

露木 ……後悔しているのか？

翠 ……いいえ。

露木 本心か？

翠 信じられませんか？

露木 ……いや……君のためだった……と云っても、分かっては貰えんかな。

翠 ……

露木 悩んだんだよ、俺だって。

翠 言い訳なんか……らしくありませんよ……

露木 君を思つての決断だった、というのは事実だ。

翠 ……

露木 考えていたんだ、ずっと……惚れた女一人、守つてやれなくて何の革命だ。そんな物は、

学生が机の上で弄ぶ、玩具のような改革論と変わらん。大人の考えるべき事は、もっと別の

事だ、とね。

翠 ……

露木 露木さん。

翠 ……

露木 ……一つだけ聞かせて下さい……露西亞へは行けたのでしょうか、同志の許にたどり着けた

ら？

翠 ……いや……

露木 ……そうですか……

露木 来るかな、葛城は……あいつ、俺の事を許せないだろうな、今は。だが、もう少し、奴も

大人になれば……きっと分かってくれるだろう。

翠 ……

露木 暫くは、不自由させる事になるよ。釈放されても監視が付くだろう……苦勞をかけるな……

翠 ……

露木 ……いいんです……

翠 ……

と、見つめ合う露木と翠……長い抱擁と接吻……

と、突然目を剥いて硬直する露木。翠が口移しに何かを飲ませた。

もがく露木をなおも抱きしめ続ける翠……

と、露木、やっとの事で翠を振り解き、夥しい血を吐く。翠の手から、あ

の薬瓶が落ちた。

痙攣しながらも、薬を吐き出そうとする露木を、翠が後ろから抱きしめた。

と、露木、絶命した。

翠 御免なさい、御免なさい！ 直ぐに逝きますから、私も……御免なさい……！！

と、露木、絶命した。

翠 ……許して下さい……私、貴方を肅清したのではありません。そんな資格なんて、私に……

貴方には、いつまでも……それは、私が……

翠 ……許して下さい……私、貴方を肅清したのではありません。そんな資格なんて、私に……

と、翠、露木の亡骸を一頻り抱きしめてから、幽霊のように樹海の奥に進んで行く。奥座敷からは、浅葱の謡う、『さすらいの唄』の四番目の歌詞が聞こえているだろう。

〜わたしや水草 風吹くままに
ながれながれて はてしらず
昼は旅して 夜は夜で踊り
末はいずくで 果てるやら

と、葛城が翠が消えるのと前後して現れた。眼前に露木の亡骸、そして…

葛城

……翠……？

と、荷物を投げ出して、翠を追う葛城……
露木の亡骸を押し包むように木霊が響く。

暗転。

松伯志

妙貞問答合

闇の中で木霊の響きが続く……と、時折、邪教の館の長い回廊を歩いている久遠の姿が浮かぶ。その度に反転して移動する壁、障子、襖……そして、その合間を縫いながら、顔のない化蝶、紋白が久遠の回りを舞飛んでいる。

と、鋭い木霊の一打ちと共に、久遠は目的の奥座敷にたどり着いたらしい。が、そこにはやはりもう一枚の襖に隔てられた「開かずの間」が……
と、化蝶揚羽が将棋盤に向かってる。対峙して立つ久遠。

久遠

やっと、来られたようですね、此処まで……

揚羽

御待ちしておりました……どうぞ……

久遠

それどころでは無い、と思えますが。

揚羽

お願いいたします。

久遠

……御相手します。

と、久遠の先手で対局が始まった。

久遠

じきに特高が来ます。

揚羽

左様で御座いますか。

久遠

宜しいのですか？

揚羽

何が？

久遠

彼らは貴女方を縛るでしょう。

揚羽 何故からで御座いましょう？

久遠 火本……違いますか？

揚羽 ……

久遠 まさか、本当に隠れ切支丹だという訳では無いでしょう。

揚羽 だとしたら……どうなのですか？

久遠 そうだと云うんですか？

揚羽 ……

久遠 ……まさか……

揚羽 ……さあ……

久遠 僕は、火本の行状を報道して、教団を潰す側に立ちました。
存じております。

揚羽 貴女が火本の信徒なら、復讐する動機もある事になる。

久遠 復讐……と、申しますと？

揚羽 引き込む事ですよ、浅葱を、貴女方の側に。

久遠 私共の、側、でございますか？

揚羽 はい。

久遠 それは、如何様な事で御座いましょう？

揚羽 ……

久遠 私共が。その『火本』を信ずる輩だつたとして、その事が何の罪科になるのでしょうか？
それは恐らく、信ずるが故、という事になるでしょう。

揚羽 火本の人々が、火之迦具土を崇め、皇統がそれに続く物だと信じたとしても、それは神仏
を信じたり、二千六百年の皇紀を信じたり、女が男を信じたりする事と、何も変わりがあり
ません。

久遠 ……国家はそれだけで不敬罪を適用するでしょう……

揚羽 左様で御座いますか。

久遠 ええ。

揚羽 国家と言う物は、理不尽な物なのでね。

久遠 ……やはり？

揚羽 ……いいえ……

久遠 火本教の総師は、国体を覆そうとした罪で、裁きの座についています。
はい。

揚羽 それは濡れ衣かも知れませんが……

久遠 火付け、物盗り、人殺し……これらの科を犯せし者は、その行いによって裁かれねばなり
ません。良しに付け、悪しきに付け、行いはその成さしめた事を問われるのです……でも……

揚羽 ……

久遠 はい。

揚羽 火本教が裁かれるのは、行い故ではありません。

久遠 ……

揚羽 貴方の仰有る通り、信ずるが故に、です……久遠さん。

久遠 そう思います。

揚羽 人は誰しも、自分に理解出来ぬ物を畏れ、忌み嫌うのでしょね。切支丹、火本、そして
……何故信じたのでしょうか、あの人達は？

久遠 それは、多分……

揚羽 居心地が悪かつたんです……家が、世間が寒いんです。

と、開かずの間に翠の影が……

翠
居心地が悪かったんです、ずっと……家が、世間が寒いんです。そんな私を連れ出して、此処ではない何処かへ……ええ、連れて行ってくれる人が欲しかったんです。

と、影は消えた。

久遠

揚羽

……

だから、信じたかったのでしょうね、パライソだの、常世の国だの、それから……

僕は信じませんよ……パライソも、常世も、国際革命も、神国日本も……

……ならば同じです。

何が？

私も何も信じてはおりません……王手。

……貴女が？

はい。だから怖いんです。

何が？

何も信じていない、そう思っている人達が信じている物が、です。

……ありますか、そんな物が？

ええ。知らず知らずに信じている、神様です。

それは？

「世間様」、です……詰みました。

……

……

と、揚羽、久遠に一礼。

揚羽

久遠

揚羽

久遠

揚羽

久遠

揚羽

久遠

揚羽

久遠

揚羽

久遠

揚羽

じきに騒がしくなります、ここも、また……

また？

ええ……蝗の羽音が耳障りで仕方ない……此処にもね、時々蝗の群が押し寄せるのですよ、

何年か、何十年か、何百年かの間を置いてね。みんな、此処でじっと息を擧めているのに……

……その度に、煩わしくて……

蝗？

蝗です。普段は、草の陰で脅えながら跳ねているだけの飛蝗なのに、寄り集まると途端に

目の色が変わって……自分達と毛色の違う物を根こそぎ食らいつくそうとするのですよ、バ

リバリムシヤムシヤ……

……それが……

ええ。

……合わせて貰えますか、浅葱に……

はい。

と、背中合わせに立つ久遠と揚羽……そのまま久遠は正面に進み、揚羽は奥に向かう。

拾貳 丸血留の道

と、二人の間を移動する襖が閉ざし、再び開いた時、浅葱の姿がある。先だつてと同じように、幾重にも着物を羽織っているだろう。と、久遠と浅葱、やや斜に構えた背中合わせで座る。その背後には、開かずの間の姉妹が見えているかも知れない。

久遠 具合はどうだ？

浅葱 お陰で、宜しいです、今は……

久遠 ……そうか……

浅葱 はい。お二人とも、とても親切です。

久遠 ……浅葱。

浅葱 はい、兄様。

久遠 ……

浅葱 兄様？

久遠 俺は、この屋敷を出る……森を抜けて、俺達の居るべき場所に帰る。

久遠 ……

浅葱 この屋敷の姉妹の言動は常軌を逸している。このまま此処に居たら、俺達まで変になってしまうぞ。

久遠 お世話になった方を悪く云うなんて、兄様らしくありません。

久遠 ……付いて来られるか？

浅葱 ……何処へ……？

久遠 帰りたくないのか？

浅葱 浅葱の家は、もうありません……御婆様が亡くなって、一緒に暮らす人も、もういません。

久遠 父様も義母様も、ずっと前に逝ってしまいました……

久遠 ……遠縁の睦彦伯父さんが、お前を引き取ってくれる。

浅葱 兄様は斑谷の一族がお嫌いでしょう？

久遠 ……

浅葱 ……私は兄様に嫌われたくない……

久遠 浅葱……

浅葱 良いんです、分かります、浅葱にも……人は誰かの知り合いであるとか、縁戚であるとか云うだけで、自分も何か他人と違った特別の人間だと思ひ込んでしまうんです、私の父様も……

久遠 ……

浅葱 叔父や叔母達も、忠興侯やガラシャ様の貞烈を誇りながら、その信心の如何にを、知ろうともしなかった人達です……だから……

久遠 揚羽に切支丹の理を吹き込まれたのか？

浅葱 私からお願ひして教わりました。

久遠 ……で……？

浅葱 家も、信心も、棄てられる物だと思ひました。

久遠 お前は斑谷の子だ。

浅葱 棄てます、そんな物。兄様の棄てた物なら、棄てられます。

久遠 俺は元々、一族の他人だ。お前の、父親の、二度添いの連れ子だ。

浅葱 ……血に拘っているのは、浅葱ではなくて、兄様ではありませんか？

久遠

浅葱

久遠

……

……兄様、森が近道だと云ったとき……

ああ。

私、本当は迷ってしまえば良いと思っていました。

……

迷って、そのまま死んでしまえば良い、そう思っていたんです、兄様と一緒に……

浅葱？

力尽きて、朽ち果てて、森になってしまえば良いと、そう……兄様と死にたかったのです、

浅葱は！

……何故そう思った？

兄様が浅葱を棄てようとしていらしたから……

莫迦な……

兄様は、浅葱を斑谷の一族の中に棄てようとしていました。

違う。

ならば……何故？

……森を歩いておりましたら、子供の頃を思い出しました。

……

兄様は蝶々を採るのがお上手でした。

ああ。

黄斑日陰、青筋揚羽、端黒豹紋、黄縁立羽、大一文字、墨流し……兄様に採れない蝶々は

ありませんでした。

ああ。

でも、兄様は……

ん？

浅葱が強請って捕まえて下さった蝶々を、必ず放しておしまいになりました。

……

兄様は仰いました……「ご覧、浅葱。蝶は自由に飛んでいる時が、一番綺麗なんだぞ」

……

……ああ、そうだったね。

死にたくて……出来ることなら死にたくて森に入ったのに、体が軽くなるんです、血が透

き通って行くようで……私、蝶々になりたいと思いましたが……いつの頃からか、お避けにな

るようになりましたね、浅葱の事……それから、兄様は家を出て……

……

一族の虫籠に浅葱を閉じこめて、また何処かへ行ってしまうのですか？

違うんだ！

何が？

……

兄様？

俺は怖いんだよ、お前が……

……

お前は、斑谷の娘だ。解るか、お前は俺にとつて、母を奪った男の娘なんだ。母がお前の

父親に抱かれた日、俺は決心した……この血を根絶やしにしてやろうと……だから俺は、あ

の男の娘を精一杯慈しみ、幸福の絶頂にある頃に、陵辱し、ボロボロに引き裂いて棄ててや

ろうと思っていた。お前をだ、浅葱！

浅葱
久遠

……

俺がその計画を実行に移す前に、あの男も、母も逝ってしまった。だからと云って計画に変更を加える気は更々なかった。母が奴の子を産まなかったのはもっつけの幸いだ。これで斑谷の血も、忌まわしい転び伴天連、増淵の血も絶える……だが……

浅葱
久遠

……はい。
……お前は美しくなりすぎた。俺には分からなくなった、それをするのが、復讐の為なのかどうか……そして、俺は気付いたのさ、どうしようもなく、お前を自分の物にしたいと思っっている俺自身に、お前の俺を見る目にも……だから、だから俺はお前から逃げてしまったかったんだ！

浅葱

……兄様……

久遠

……抱いて、兄様……

浅葱

……！

久遠

ずっと思っていたんです。そうして欲しかったんです、したいんです……

浅葱

よせ。
世間に帰れば、私達は兄妹です、でも……ここに居て下さい、兄様。

久遠

やめないか！

浅葱

……蝶々に生娘はいない、と聞きました。蛹から蝶に羽ばたくのは雄の蝶が先、未だ孵らぬ雌の蛹の回りを、雄の蝶々が待ちわびて、飛び回って……

久遠

……

浅葱

浅葱はまだ蛹です。その蛹の側に居るのは、兄様だけ……

久遠

俺の物になる、と云うのか、お前は？

浅葱

はい。

久遠

慰み者になれるのか？

浅葱

はい。

久遠

冥土の父親が泣くぞ。

浅葱

構いません。
俺はまだお前に復讐したがっているのかも知れない。

久遠

はい。

浅葱

それで、殺されても良いのか？

久遠

はい。

浅葱

畜生道に墜ちるぞ。

久遠

はい。

浅葱

俺の望むままにすると云うんだな。

久遠

はい。

浅葱

……

久遠

……そうなりたいんです、だから……

浅葱

……ならば、此処を出るんだ。

久遠

……

浅葱

じきに特高が来る。あの姉妹と共に居れば、お前も縛に付く事になる。火本だろうと、切

久遠

支丹だろうと、何だろうと、だ……

浅葱

……試したのですね、試してはいけない事を……

久遠

……浅葱……

浅葱

……

久遠

……

風がふく……低い唸るような風……

もう、行つて下さい……

……

……世間に宜しく……

浅葱
久遠
浅葱

と、浅葱、久遠に背を向けて、開かずの間の間に消える。後ろ向きの化蝶の姉妹の影……

と、風の唸りは、次第に重苦しい別の音に変わっていく。蝗の羽音を思わせる、地響きのような、音……

久遠さん。

えっ？

蝗が参りました……

揚羽
久遠
揚羽

と、開かずの間の灯りが消えた。

松竹参
破提拵子

低い唸り声の中から、「増淵さあん」と久遠を呼ぶ声がある。葛城である。

久遠、佇立したまま動かない。

葛城、奥座敷まで駆け込んできた。

ここに居たのか？

……

早くしないと、奴らが来るぞ！

奴ら……特高か？

判らない。あいつら、目の色が違うんだ！ 蝗の大群みたいに……奴ら、何もかも踏み潰

しちまうつもりらしい。

蝗……

俺達は良い、とぼちちりを受けたいのか？ 今の奴らに、誰彼の区別は無いぞ！

久遠
葛城

暴風雨のような暗がりとは喧噪に襲われる邪教の館。

と、異端審問官のような法服に身を包み、頭巾を目深に被った近衛と東条が舞

台の両翼に立った。

来た！

ついにたどり着いたぞ、東条君。思えば長い道のりでしたね。

はっ！

葛城
近衛
東条
近衛

狂信者だの赤だのといった連中は、一瞬たりとも気が抜けないのだよ、何しろ、奴らはこの日本が神聖不可侵の神の国で、大東亜の、ひいては世界の中心であるという、子供でも知

東条 っっているような常識中の常識すら理解出来ない異常な連中なのだよ……
はっ！

近衛 神聖にして不可侵なる皇国の民を惑わせし淫祠邪教の一族に、畏れ多くも神武神日本磐余彦天皇より二千六百年、百二十四代の現人神に成り代わり、神意を申し告げる。

東条 「乾を父となし坤を母となし、人その中間に生じ、三才これに定まる。それ日本はもとこれ神国なり」

近衛 「日本は神国、仏国にして神を尊び仏を敬い、仁義の道を専らにし、善悪の法を匡す」
東条 「かの淫祠邪教の徒党、みな件の政令に反し、神道を嫌疑し、正法を誹謗し、義を損ない、善を損なう。邪法にあらざして何ぞや」

近衛 「日本国のうち寸土尺地、手足を措くところなく、速やかにこれを掃蕩せん」
東条 「強いて命に違う者あれば、これを刑罰すべし」

近衛 「其の科、甚だ重うして、天罰！」
東条 「仏罰！」

近衛 「神罰！」
東条 「人罰、一つとして免れず」

近衛 「これ、公儀よりの御征伐に非ず、悪逆無道の自業自滅なり」罪科を告げよ！
東条 一つ、天津神に有らざるアラハバキカムイを奉ぜし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 一つ、流されし水蛭子を七福神に加えし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 一つ、切支丹邪宗門に加担せし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 一つ、畏れ多くもスメラミコトを政治機関と呼びし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 一つ、国体に異議を唱え、赤き神を奉ぜし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 一つ、己自らを奉じ、世間に背を向けし科。

近衛 踏み絵を踏ませよ！
東条 ……

久遠 ……：そうだよ、それがいつものあんたらのやり口なんだ。何だって向き合わずに転ばせる
葛城 ……：俺達が何かを考える事、それそのものが気に入らないんだ！

近衛 喧しい！ おい、この便所蟋蟀を黙らせろ！
東条 はっ！

と、東条が捕虫網を振るうと、もんどり打って倒れる葛城。

久遠 葛城！

近衛 我々は悔悛の機会を与えているのだぞ。感謝して欲しいものだな。

葛城 まっぴらだ！ あんたらは、国を選ぶ自由も、主義を表明する自由も俺達から取り上げたんだ。せめて、何が好きで何が嫌いかを考える自由ぐらいは認めてくれたって良いじゃないか！

東条 黙れ、虚け者！

と、東条が捕虫網をクルリと回すと、腕をねじ曲げられたように突っ伏す葛城。

葛城 畜生、俺は屈服しないぞ！ 貴様らのような連中は、いつか時代に清算されるんだ。たとえ、俺をなぶり殺しにしようとか、覚えておけ！

と、東条と近衛、再び捕虫網で地面を打つ、叩く。その度に悶絶する葛城。

久遠 ……
葛城 増淵さん……逃げろ……こいつら、人間じゃねえ……いや、人間はこんなに残酷にも非道にもなれるんだ。その事を……

と、近衛が捕虫網を一打ち。息が詰まったように硬直する葛城。

近衛 更生の見込み無し。治安維持法違反で終身禁固に処す……扉を開けよ！ 邪教の本殿を破壊せしめよ！

はっ！

……やめろよ……

近衛・東条 ……

やめろ……そつとしておいてやれ。

何か聞こえたか？

はっ、それらしくあります。

……寒いんだよ、家が、世間が……だから、こんな所まで来て、じつと息を顰めているんだよ……それで何か、あんたらに不都合が有るのか？

こいつ……

云わせてやれ。

人殺しの罪なら、殺した奴だけを引つ立てろ！ 火付け、物盗り、強姦、暴行……それはみんな人の道に反するんだから……だけどな、何を思うかの自由ぐらいは俺達に残しておいてくれよ。

……増淵さん……よせ……

息が詰まってるんだよ、俺達は！ 殺し合いがやりたければ自分達だけで、勝手にやれ！

犯人探しにも、正義漢ごっこにも飽き飽きしてるんだ。そんな事はどうだって良いんだ。

この居心地の悪さを何とかしたいんだよ。だから、こんな人里知れない森の奥で、世の中を、世間を疑う自由だけは欲しいんだよ！ 解ったかよ、日本教の、世間一般常識教の邪宗門野郎！

……

……

……

東条 大元帥閣下の詔、及び陪審員世間様、御天道様の裁定により、当証人の主張を却下する。
近衛 並びに証言の全てを記録より削除し、本件の審理には一切考慮に入れぬ物とする。なお、格別の慈悲により、証人の不敬罪に相当する言辞に対しては、今回限り不問に付すとの御沙汰があった。証人は一層の忠君愛国に励み、報道官の本分を尽くし、皇国の治安と道徳を堅持せしむるよう希望する。以上、有り難くも大本営よりのお達しである……扉を開けよ！
東条 はっ！

と、東条と近衛は、開かずの間の襖に向き直るだろう。久遠、そして息も絶え絶えの葛城も、彼らの行く先を阻もうと身を乗り出すすが、捕虫網の鉄槌が、

容赦なく彼らの上に振るわれる。
と、蝗と化した特高刑事達の手が掛かろうとする刹那、開かずの間の襖は天の岩戸のように開く。その先には、更に十重二十重に続く無数の襖が続き、それがまた一枚、また一枚と開いていく。
と、無数の蝶のようにも、花びらのようにも見える紙片が、吹雪のように舞い上がり、圧倒された人々の眼前に現れる双頭の巨大な化蝶……
化蝶の姉妹は分裂し、増殖するように舞い、常世の彼方へと去っていく。
その開かずの間の奥に残された、一枚の絵……

木霊の響きと共に、暗転。

拾四 回帰

木霊の響きが続く。そこには昼なお暗い森があるが、朝靄の中に木漏れ日を作る筋が、何本か見えているかも知れない。
と、そこに静かな足取りで入ってきた男があった。些かの年輪を重ねているが、葛城である。
じつと、木霊に耳を傾けながら木漏れ日を凝視して……
と、序景に現れた絵日傘と紅襦袢の帽子の男がそこに居る。

帽子

葛城

判らないか？ ……俺だ。

と、帽子の男が、帽子の鏝を上げると、見覚えのある顔があった。
久遠である。

葛城

……やあ。

久遠

ああ。

と、葛城、会釈した。

葛城

十年……ですか、もう。

久遠

十年？

葛城

ええ、十年ですよ、あれから。

久遠

そうか。

葛城

ええ……迷って十年、また戻って来てしまいました。

久遠

どうだ、世間の様子は？

葛城

えっ？ ……ええ、ありましたよ、色々。

久遠

火本の預言通り、日本には火の雨が降った、か……皮肉な物だな。

葛城

はい。そして生ける神は人になった。やり切れませんよ……

久遠

ん？

葛城 あの人を神だと信じて死んでいたり、それで殺された人達ですよ。これにて一件落着な
んですから……あの人達も……

久遠 あ？

葛城 ほら、あの二人です。近衛さんはソ満国境、東条さんは沖縄へ行ったようです。
それで？

久遠 (首を横に振った) 関東軍ならシベリア辺りに、ひよっとして……

久遠 約束の地の果て、かね？

葛城 ……人が悪いなあ、久遠さん。

久遠 きつと良い奴だったんだろうな、家に帰れば……

葛城 ええ、良き父、良き夫、良き息子……分かりますよ、今は少し。私も少しは大人になりま
したから……露木さんの云うような大人にはなれませんでした。

久遠 だから来る気になった……ちがうかね？

葛城 ええ。寒いんですよ。

久遠 ……そうだな。

葛城 義妹さんの行方は？

久遠 (首を横に振った)

葛城 ……そうですか。翠……霧島さんもあれつきり判りません。

久遠 近頃、軍隊擬きがこの森を訓練行軍するんだが……

葛城 警察予備隊ですね。あれは軍隊ですよ……いや、失礼……それが？

久遠 家出人の搜索でも見付からなかった死体をね、見付けるんでそうだが……まあ、その中
も無い、となれば……

葛城 はい。

久遠 お互い、夢を見ようじゃないか、葛城さん。

葛城 同感です……あの館はね、幕府の追求を逃れた隠れ切支丹が居たそうですよ。昔々……

久遠 昔々、か？

葛城 昔々です。

久遠 詳しいな……何をしてるんだ、今。

葛城 ブンヤですよ。

久遠 赤新聞、かね？

葛城 ……まあね。

久遠 ……

久遠 ……

久遠 夢を見たのかもしれない、森の酸素に酔っぱらって。

葛城 かも知れない……しかし……

久遠 ああ……これからも、世間が寒くなった人達が、誘蛾灯に惹かれるようにやって来るんだ
ろうね、ここに。
ええ。

葛城

と、突然、木々の間から、一組の少年と少女が現れる。それはひよっとし
て、あの……

と、目を合わせて硬直している葛城と少年達。だが、久遠は動じず。

葛城 あ、君達……

少年 ……

少女 行こう！

と、少女に引っ張られて、共に去る少年。

葛城 待てよ、おい……
久遠 止せよ。
葛城 ……えっ？
久遠 良いんだ……ほっとけよ。な……
葛城 ……
久遠 行こうか？
葛城 ……はい。

と、正面に向き直り、ゆつくりと歩を進める久遠。それに従う葛城……
と、樹海の彼方に、あの邪教の館の灯りが見える。揚羽、紋白と見える影
が、将棋を打っているのかも知れない。静かに、厳かに続く木霊の響き……

葛城 久遠さんは、ここで？
久遠 バタフライ・ウオッチング……蝶々の観察……つてところかな。
葛城 昆虫採集……じゃなく？
久遠 そんな無粋はしないさ……舞飛ぶ蝶に、勝る物無し、だ……
葛城 何か見られましたか？
久遠 ああ……綺麗だったよ……紋白蝶が一头、深山鴉揚羽が一头だ。
葛城 紋白蝶が一头、深山鴉揚羽が一头……
久遠 もっと良い物が有るんだ、教えてやろうか？
葛城 それは？
久遠 羽化しそうな蛹が有るんだよ。浅黄斑と……
葛城 はい……
久遠 霧島緑蜷のね。
葛城 ……

と、二人は立ち止まった。

久遠 聞こえるかい、木々の息吹が？
葛城 ええ。
久遠 木霊と話した事があるか？ 山彦じゃない、『木霊』とだ。
葛城 ……ええ……
久遠 ……
葛城 ……
久遠 一緒に来るかい？
葛城 ……
久遠 どうする？
葛城 ……お供します、喜んで。

と、久遠と葛城が、再び歩を進めると、邪教の館の灯りの中で対局する姉
妹の影が、互いに礼をして立ち上がった。

と、新たに二つの化蝶の影がその中に加わり、新たな対局が始まった。浅黄斑と、霧島緑蜆……
木霊の響きがいつまでも続いて……

続劇 to be continued "CHILDREN OF THE EDGE"

付記

本作中、火本教の預言については、出口王仁三郎著「靈界物語」から、隠れ切支丹の「おらしよ」その他に「切支丹書」、「廢耶署」の一部を改変の上、使用させて頂きました。
『さすらいの唄』および『紀元二千六百年』の作詞作曲者は本文中に示す通りです。
歌詞は復刻版CDから採録いたしました。

上演記録

『真・化蝶譚』 P-B O X

【時】 一九九六年五月二十二日〜二十八日

【所】 大塚・ジェルスホール

【スタッフ】

作・演出・衣装：野中友博／美術（絵画・書）：東野元昭／音楽・音響：寺田英一／装置：亜飛夢／照明：中川隆一／舞台監督：富川 孝／宣伝美術（デザイン）：河合明彦（書）：東野元昭／タロット・カード作製：河合明彦／制作：在倉恭子

【出演】

久遠・帽子の男：中川こう／浅葱：広瀬奈々子／露木：仲根吉広／葛城：渡辺 聡（俳優座）／翠：加藤あゆみ（扇座）／近衛：白川智義／東条：小林勇治／揚羽：北島佐和子／紋白：恩田眞美

『化蝶譚』 演劇実験室：紅王国 第壱召喚式

【時】 一九九八年六月十日〜十七日

【所】 ウッディーシアター中目黒

【スタッフ】

作・演出：野中友博／音楽：寺田英一／美術：東野元昭／共同美術・装置：伊達一成／照明：中川隆一／宣伝美術：河合明彦／振付：花柳司紗緒／衣裳：在倉恭子／舞台監督：葛城啓史／制作：島田雄峰

【出演】

久遠・帽子の男：中川こう／浅葱：広瀬奈々子／露木：山崎英正／葛城：久米暁／翠：鯨沢ゆき／近衛：松本淳一／東条：末次浩一／生：園部貴一／智恵：小松エミ（演劇集団円）／揚羽：北島佐和子／紋白：恩田眞美／化蝶：沢村小春・今村恭子